
シャトヤンシー

東野咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャトヤンシー

【Nコード】

N21780

【作者名】

東野咲希

【あらすじ】

新一が身辺調査を頼まれた女性は、ずっと前に体の関係を持ってから行方をくらました宮野志保だった。

そこから少しづつなにかが変わっていく。そう、でもかわってはいけない？

新志。新一くんは蘭ちゃんと結婚してる設定。

タビュラー

手を上げて。

体を伸ばして。

叫んで。

こっちにいるって、合図して。

だけど振り向いてくれなかった。

「うううっん・・・」

怖いくらい空が碧く晴れた金曜日の午後。

やり過ごせば土曜日、社会人はだいたいみんなそう考えるのではないだろうか。

伸びをしながら、立体感のある雲の隙間をながめていた。

背中で、とんとんと静かに近づいてくる気配。

依頼か蘭か誰かだろう、そう思って向き直った。

事務所のドアが遠慮なく開く。

このときどき感が堪らないけど、最近鈍ってきたかもしれない。

「いいかね」

なんだ、とちよつとだけ期待した自分をアホらしく思う。

ちよつとメタボ気味の中年男性が堂々たる貫禄で煙草をふかして立っていた。

聞くところ、やっぱり読み通りそこそこの知れた薬に関わる企業の社長ポジションにいる男、笹野と言った。

自分が高齢で持病も患っているため、我が息子に跡を継がせることを考えているらしい。

だがしかしその息子は大層恋多き遊び人だということで、ひとりの女性に恋患っているあいだは仕事どころか食事さえまともに手に付かない状態になるらしく、それではどうにもならないので会社には女性はいても中年の女性だけしかあまり入れないことにしているらしい。

しかし極めて優秀なため特別に引き入れた女性社員をこんどは口ツクオンしてしまい、それが半端じゃない熱中ぶりだそうで。

よくある話。

草食系男子がああだこうだいわれているけど、こういう男も少なからずいるんだから嘆くこともないだろうに。

結婚させれば落ち着くのではないかと、ふたりが確かになるのであれば考えているという。

でもその女、どうやら内輪が広い会社の中でも素性が良く分らない。

社長の妻になるもとより、どこの馬の骨かわからない女に社長の妻の座を渡すことも気が引けるのでここへ依頼に来た。

その女性の写真と住所が入った封筒と依頼金の半分を置いて笹野は出て行った。

「まあいまどきそんな男もいるもんだね、」

青春時代も蘭一筋で女遊びなんて少々しかなかった。そもそも大半は小一だったから。

蘭とやっとこさ結婚までこぎつけて。

それから彼女が、

宮野が・・・

思い出して後悔した。

一気に持ち上げた気持ちはまっすぐにあの頃の記憶へ帰っていく。
忘れようと努力すると意識するから忘れられない。

分かっている。

白い肌が。

薄くてやわらかな唇が。

甘えるような切なげな声が。

最後に笑って見せた顔が、あんまり苦しそうで、手を離してしま
った。

はつきりと覚えている。

記憶はなくなるものなんじゃなくて、忘れるもの。

思い出せば帰ることができる。

ときにそれが都合よくて、やるせないときもあるけど・・・。

まぎらわそうと、笹野が置いていった封筒をひっくり返した。

ほと、と社員旅行だか集合写真だかと裏紙のメモが出てきた。

何気なく返してみる。

びっくりした。

「あ、．．．」

どこん、と重い心臓が飛び跳ねる。

どぐんどぐん熱い血が流れ出してきて、もういちど写真を見直してみる。

かわりもしない。

どこか抜けたあの雰囲気。

あの猫っ毛の髪は肩ほどまでになっていて、でも彼女にしか見えなかった。

メモを裏返す。

『 宮野志保 写真左上隅の茶髪の女性 』

こんな偶然があるもんなのか。

もしかしたら別人、なんてそんな考えはなかった。

また、会ってどうする？ そんなことも思わなかった。

仕事用鞆をひつつかんで、轟々した身体状態のまま外に飛び出た。

タビュラー（後書き）

突発的に始めた連載。

なんのこつちなことも有ると思いますが、次話でだいたい明らかになってくると思います。

不健全ばんざいです。

タイトルの意味に関しては活動報告にて。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

インクルージョン（前書き）

新志。

インクルージョン

「こんな近くに住んだのか、」

メモに記されていた住所は思いの外近かった。

事務所から電車で何駅、というところだ。

それで県外の会社に通ってたっていうんだから、巧い身の隠し方だ。

4世帯ほどのカタカナ名前のアパートの三階に上る。

「宮野」と差された名札に、ずきずきと凡庸な胸の高鳴りを覚えた。

あの社長がいうからには、独身なんだろうな。

そんなにつきまとわれているのなら、男だつて寄りつくスキもないはず。

友達とか、いるのかな・・・。

あいつ人付き合いへたつぴだから、なかなか溶け込めていないこともあるかもしれない。

事実社長の話しぶりからだと浮いているようだし。

写真をみて、ふと思う。

博士のところから姿を消して何年か、笑ったときがひとつでもあったのか。

あらぬ心配。

もうすぐ逢えるのに。

たいして役にも立たない深呼吸をひとつして、古びたボタンをくぼませた。

押したチャイムの音をききながら、ドアの向こうに人の気配を感じる。

「はい」

たまらなく懐かしい気持ちにさせる。

心臓が転がってしまいそう。

「宅急便です」

俺だと言ったら、たぶん開けてはくれないだろう。

悪いと思いつつも、とりあえず仕事の面目で来てるから嘘も方便、と慣れきった言い訳を繰り返す。

がちや、と重く開き、びきつとチェーンがドアの開閉を遮った。

「はい、お疲れさ、」

はんこ片手に翠玉の瞳がこちらを見上げた。

かちりと、目線が合った。

実況する間もないほどに、固まっていく。

とっさにドアを閉めようとした。

コンマいくつかの差で間に足を引っかける。

「あなた、どうして」

言葉を失ったように驚愕に顔を染める。

長い髪がエプロンの裾を隠す。

写真では分からなかったけれど、腰ほどまで伸びている。

あの頃のままかわらない美しさ。

「まさか、博士、」

「博士じゃない」

「じゃあなんだっていうの。いまさら、関係ないで——」

ドアを強引に開いて、素早くチェーンを外す。

入ろうとすると、細いからだが妨害する。

だけどその華奢な体では男の押しに耐えられるはずはなく、圧倒的に自分の方が優勢だった。

「や、めてっ、入ってこないで、帰って」

「帰るわけないじゃん。何、社長の息子でもあがってきてんの？」

「！　なんで・・・」

途切れ途切れの押し問答が続く。

そのときだ。

「奈々っ！来ちゃだめっ！あっち行ってなさいっ」

必死で叫ぶ彼女の力が緩み、勢い余ってふたりで玄関に倒れ込む。

とっさに彼女の頭を庇い、どちらのものかわからない熱が繋がる。

息が落ち着き、ふと前を見上げた。

今日二度目にびっくりした。

「お母さんに、なにか？」

男か女か分からない中性的な小さい顔がこちらをみつめていた。

インクルージョン（後書き）

間を取って緊張感を出すため文字が少ないやもしれません。
この話でもぜんぜん背景がわかりませんね（^ー^；）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

アステリズム

今少し、時間が止まったような気さえた。

でもそんなことは物理法則に則って生きている限りあるはずはなく、実際は何秒かだったと思う。

「お母さん？」

何が何だかわからないまま下にいる彼女が暴れもしないのを不審に思い、そっと体を離してみた。

「・・・気絶してる」

すうすうと寝入ったような呼吸。

どうしたものか、子供がしゃがんで「あーあ」と声を上げた。

「おにいさん、何したの？」

感情のない瞳。

蒼玉と茶色がかった髪をゆるくひとつに束ねて、神秘的な雰囲気も増していた。

どこか外国めいた目鼻立ちは彼女に似ている。

「お母さん最近ろくに寝てないから寝かせておいてあげて。中入っていいから運んでくれる？」

抑制のない平坦な声は妙に説得力があつて、体重を感じさせない体を横抱きにし奥の部屋に入っていった。

「・・・知り合いさんねえ」

湯気を消していく湯飲み茶碗をことりと俺の前におく。

小さそつなのにしっかりしてんな、なんて思いながら横に寝ている宮野の頭にそつと手を伸ばしていた。

「てつきりお母さんに言い寄ってる男の人が強行突破に出たのかと思った。困るんだよね、ああいうの。あ、知らないか」

「ふうん・・・」

知ってるなんてことも言えず。

「でもおにいさんも普通の知り合いじゃないでしょ?」

「ん、まあそうだけど・・・きみ、お母さんは?」

「お母さんはこのひと。お父さんは昔からいない」

まさかな、と思いながら組み立てていた推論はますます信憑性を増した。

「でもまあ、悪い人じゃなさそうだし、お母さん起きるまでまっ
てたら？」

「ありがとう。そういえば名前、なんていうの？」

何かが隠されている名前かもしれない。

「名前？」

意外なように目を見開き、

「みやの、なな」

と息だけで答えた。

なな。

「なんでなな？」

「知らない。わたしのお父さんからとったって、前いていたけど。」

「お父さんから。」

「うん」

七。

奈々。

奈菜。

菜々。

なな。

ナナ。

特に頭文字だとか見当たるものではなくて。

でも。

この子が「あの夜」にできた子供だとしたら、すべて納得がいく
気がするんだ。

年数もこの子の年ほどに合っている。

ずっとそう考えていた。

いなくなったことも、博士にだけしか連絡先を教えなかったことも、結婚式にこなかったこともそうしたら分かる。

「奈々、か」

お茶を啜ると、鼻から香ばしい香りが抜けていく。

美味しいお茶。

でも宮野ほどじゃない。

お茶でもコーヒーでも、何でも宮野が淹れるものは美味しかった。

自分で淹れてもいまいち美味しくないし、蘭のも微妙に味に差がある。

完璧にいつも好みのコーヒーを淹れてくれるのは思えばこいつだけだった気がする。

この子供は誰の子？

なんでもっと早く言ってくれなかった？

どうして何も言わずに姿を消したりした？

問い詰めたことたくさんある。

頭いいくせに、不器用な理屈で丸め込もうとする昔の癖は、変わっていないような気がする。

無意識に撫でている髪が、ふると手を振り払った。

「しんいちのしとち、しち。それで、なな。」

朗読でもしてるように呟く声。

「起きたの？」

「頭ずつとわしゃわしゃされてたからね。うざったいったら。ありがとう奈々、お茶淹れてくれて」

奈々の頭をゆるやかに撫でる彼女の眼差しは、まぎれもなく母のものだった。

「ううん。それはいいけど、お母さんだいじょうぶ？」

「ええ、だいじょうぶ。心配ないわ」

それから彼女は、奈々に買い物をしてきてほしいとお金とメモを渡す。

子供にはきかせたくないのだろう。

聞かせたくないような話、たくさんするつもりだし。

そうそうに送り出してから、ゆっくりと起き上がった宮野の背を

支えた。

抵抗はしなかった。

「ごめん。無理矢理入ったりして」

「別に。でも奈々を怖がらせるのはやめてほしいわね」

「怖がってた？」

首を傾げた。

宮野によく似た子だなと思っていた。

冷静で、多少のことでは表情を変えないような。

「奈々が急にものわかり良くなるときは、何か不安に思うことがあるときだけ。いつもはお使いなんか行かないのよあの子」

奈々のぶんのお茶をすすりながら、じろりとこちらを見た。

「……やっぱ母親なんだな」

「で？　なんでここへ来たの？」

「前、お前を偶然見かけてつけたらここだったから」

今は社長に頼まれて身辺調査をしていることは詳しく言わない方がいいだろうと踏んで嘘を吐く。

「悪趣味ね」

「そら探偵だから」

「でもどうして社長の息子さんのことを知っていて奈々がいることは知らないの？」

「あ、あのいや、前つけたときに変な男がそんなこと志保に喋ってるの見て・・・」

「正義感と好奇心の強いあなたなら黙ってそんな現場をみていることはないと思うけど。」

社長からでも身辺調査依頼が何か受けてそれが私で吃驚して私情をもちこんでここに突入してきた、そんなところかしら」

何気なくなぞられ、言葉につまる。

それをみて彼女はお茶での熱い息を吐いた。

「隠したってわかるわよ」

吐息だけのばかね、が懐かしく鼓膜に響く。

とたんに愛しくなった。

「いや、言わないつもりはなかったんだけど・・・」

「いつておいて。大変恐縮ですが私は笹野さんにはあまりいい感情を抱いておりませんあちらが勝手に熱を上げていらっしやるだけですのでこれからもしエスカレートするようなことが有れば訴えることも考えますと」

早口でまくし立てる彼女の顔にははつきりとした嫌悪が浮かんでいて、俺が押し入ったときも奈々はそんなことを言っていたのと合

わせるとよほどその息子つてのが酷いんだな、と少し同情した。

あの父親からすると仕事は出来るがやり方が嫌われるようなタイプだろう。

そんなことを言うと、「私みたいな仕事は仕事が出来ればなんぼなの」と切り捨てていた。

ふいに言葉が途切れる。

お互い、腹の内ではいろんなものを巡らせているのがわかるような騒がしい静寂。

破ったのは彼女のつぶやきだった。

「おそかったの」

「え？」

「奈々ができたとわかったとき、もうあなたの結婚式前夜だった」

そのうるささにまみれない凜とした声が、頭の中でループした。

アステリズム（後書き）

最後の文でだいたいい想像はつくだろうふたりの過去。

奈々ちゃんは．．．工藤氏なら思いつきそうですよね。

ここまで読んでくださりありがとうございました！

エンハンスメント

「検査結果、体神経その他異常なし」

胸がばくばく破裂しそうな、解毒剤で戻るときと等しいほどの高鳴りの苦しさ。

そこに心地よい涼やかな彼女の声は焼け石に水効果、思わず立ち

上がってしまった。

「まじで？」

晴れた小春日和のことだった。

つい三日ほど前に完成品と渡された解毒剤をふたり一緒に飲み事後経過をみているところに、彼女から連絡があつたのだ。

「まじよ。言い立てることも特にないし、影響はないわね。きちんとした生活をしていればの話だけど」

「でも、もう、またコナンに戻ったりしねえよな？」

「これでも自信作だからそれはないわ。試作品で耐性ができはじめていた体に中途半端なモノは毒よ。何、そんなに心配？」

カルテをまとめて立ち上がった宮野を申し訳なく思いながら見上げる。

いつもの何とも思っていないさそうな顔だけど、かすかに疲れた色が混じっていた。

「そうじゃねえけど、俺調子のもつてかなり．．．飲んだじゃん。だからしつぺ返しが．．．」

「ふつうなら来るでしょうね。この解毒剤も効かない可能性はゼロではなかったんだけど．．．確率に勝ったのね」

あなたは強運だわ、とドアを開きかけ、

ふと彼女が振り返る。

髪がなびくのが思いの外綺麗で、一瞬を無意識のうちに反芻した。

「未検査の箇所がひとつだけあったわ」

しかしそれが、浮き立っていた俺の耳にその言葉は重大のなかにカテゴライズされなかった。

軽く、「どこ？」と尋ねる。

痛い検査も何もかも、すべてあときは容易いことに見えたのだ。
こんなに強運なのだからそれぐらい何でもないと。

「生殖器官」

「・・・あ？」

変な声が漏れる。

おかしなひと、という顔で振り返り彼女は具体的に説明してくれた。

「異性と恋愛関係になるのなら避けてはゆけない問題よね？　こういうデリケートな部分は検査しにくいし検査の方法も特殊なの。だからどういった検査手順にするか、意向が固まったら言うつもりだったのだけれど」

「ちよちよちよちよいまち、宮野、それ、」

彼女の肩を掴んでぎしぎし揺らす。

やめてよ、と振り払いながら平然と、

「なに、意味わからないの？ あかねえ、つまり性行為をするときになくってはならな、」

「だーっ分かったからそんななんでもなさそーに言うなってーの！！」

手のひらも顔も、全身に血がのぼる。

今真っ赤だろうなということが分かって余計恥ずかしくただしそれを自覚するとますますやりきれなくなる。

研究者だし科学者だしこういうことなんて扱い慣れているのは予

想していたけど。

とりあえず女なんだからそれらしいオブラートに包んだ表現をして欲しい。

「あなた、本当に年頃の男の子なのね」

こういう言葉に敏感なお年頃ってものなの？

「だあ．．．．．」

「だいじょうぶだとは思うの。検査では特に異状も見られないし。だけど万が一、あなたが蘭さんとしてきちんと出来なかったら立ち直れないでしょう。でも実際に勃起させてちゃんと刺激されて射精するかどうか、精神的な部分も影響するし」

「．．．」

頭を抱えた。

「どうする？ あ、私なんてどう？」

「は？」

「私もちゃんと愛撫されて反応するか。ちゃんと男性器を受け入れられるか。女も直接理論しかないの。まあ私はそこら辺を急いで心配することはないのだけれど」

誰かさんみたいに相手もないしね、なんて言う宮野の顔がぐくりと回る。

「あ、あの、は、いや宮野サン、」

話はアクロバットで放物線を描きながらあっちこっち投げ進んでいくのである。

少し待つて欲しい。情報整理は得意なはずなのに。

宮野は俺の生殖器官類の部分がまだ未検査だということを言った。
だがデリケートな部分であるがゆえ検査手順も定まらないという
ニュアンスの発言。

蘭との相手でたしかめてもいいけど、もし正常でなかったら立ち
直れないだろうからちよつと未検査であつた宮野が相手をすると言
い出した。

ぜえはあ。これでいいだろうか。

（つてかどこがいいんだよどつから突っ込めばいいのかわかんね
えくらいつてか何がいけないのかわからないつてかああああ）

「あら、それともなに。惚れた女以外は抱きたくないって？」

「ほれ・・・あ！」

そうだ。

俺には蘭がいる。

昔からずっと大切でずっと好きな蘭が。

表向きの理由が。

いくら検査だと言っても他の女を抱くわけにはいかない、その旨説明すると妖艶な笑みでくすりと口元を隠した。

「またそのトラブルがきっかけで何かの細菌に浸食されることが一番心配なの。いろいろなものへの耐性が弱くなっているから風邪だってこじらせやすいのよ。そうしたらあなた、間違いなく死ぬわ」

ぐつと押し黙る。

宮野のことは信じてる。

ある意味誰よりも何よりも。

蘭や事件とは違う別次元の大切。

だから、宮野が薬のことについて何か言うのであればそれは間違
いなく俺のために言ってくれているはずだから従うつもりでいる。

でも、抱けっというのは。

何も言わない俺をじっと見上げた彼女の手が、胸をぼん、と叩く。

「知ってるわ。知ってる」

「な、にが、」

「あなたがそういう生真面目なこと。まっすぐに第三の道をつくっておくほど器用じゃないこと」

しゅるり、と制服のネクタイが床におちる。

その動きのまま肩に抱きつかれ、顔が焦点合わないほどに近づいてゆくのが、体温で感じられた。

囁く声の距離がほどなくゼロに等しく、鼓膜をやさしく撫でる。

「これは検査なの。余計なことを思わないで」

ブレザーをそっと腕から抜き取り、ボタンをひとつひとつ外していくたおやかな手をぎゅっと掴んだ。

「こんなこと、」

「蘭さんを裏切るのはあなたの心の中でだけ。知らなければ傷つかないわ。あなた以外は」

「そうじゃねえ」

裏切るとか蘭だとか、ほんとうはそういうことじゃない。

こんなかたちで、彼女を穢すようなことはしたくない。

きつと宮野は、たったいちどの関係でまた蘭への罪悪感で潰されそうになる。

もうなにも背負って欲しくない。

隠すのが慣れているからか見えにくいけれど、どれだけその体に優しさと不安を閉じ込めてきたか知ってる。

深く深く静けさの中に強い意志を秘めた瞳が、頼りなげに揺れていく。

繋ぎ止めたいような、このまま消えそうな体の輪郭をそっと抱きしめた。

「死んで欲しくないの」

壊れぬように包み込んだ彼女がくぐもった声で呟いた。

「え？」

「最後まで責任を取りたいの。私が作った薬が起こした代償を。そつでもしなくちゃ踏ん切りが付かない。」

それに、そつも言っていられなくなるかも知れないわ？」

「責任とか、いみわかんね、あつ」

ずきり、と体中の熱が飛び上がるような感覚で、がくりと膝が力を失う。

倒れ込んだ自分と彼女、冷たい床に。

押し倒すような体勢に飛び退こうと頭は指令するのに、体は鉛のように重くひきずりもしない。

腕にも力が入らなくなり、組み敷いた宮野に体重をあずける形になる。

体が燃え上がりそうな熱。

元に戻るときとは違うもの。

「や、べえ、」

本能がひたすらそういつている。

なんとかして立ち上がろうとして、視界に入った彼女にびくりと反応した。

髪が重力に従って床へ髪へ、さらけだした首元と胸元。

整った顔に、張り付いたやわらかそうな髪。

こいつって、こんなに、綺麗だったっけ・・・。

今にも噛みついて、服を裂いて、穢してしまいそうで。

押しとどめるために噛みこんだ唇がじんと熱を持って疼く。

「何．．．副作用？」

「ふ、ふくさ、」

「強い性欲か。予想通り」

立ち上がってまとめたカルテの横にあるメモにさらさらとなにか書き込む彼女を睨み付けた。

「おま、なに言って」

「副作用。一ヶ月かそこらしたら、副作用が何らかの形で出ると説明したでしょう。高熱でも眠気でもなく、性欲で来たのね」

そんなことをいつていたような気もする。

戻れたのが嬉しくて仕方なくて、右から左に受け流していたとみえる。

「だからいったでしょう？　そうも言っていられなくなるかも知れないって」

「これくらっ・・・我慢し、」

「でもその状態じゃ立ち上がることにすら無理そうね？」

何もかも分かっている。

そんな言い方しなくても。

下半身に熱が集中し、雄の欲望が体にあらわれたのさえ認めたくはないのに。

「だいて」

挑発的に、とろみがかったような色素の薄い瞳が言う。

もう限界も通り越したほどの余裕。

空気を引き裂きながら、かき抱きながら、唇を塞いだ。

エンハンスメント（後書き）

昔のおはなし。

また次話からは、もとにもどるかとおもわれます。

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

インカローズ

長い昔話をろろろつとつぶやいていく彼女に、ぼんやりと浮かんでいたあのときの影が濃くなっていく。

確かに蘭が好きだ。

いまでも変わらず、愛している。

だけれど、満たされない何かと取り残してきたようなものを感じ

るのは、蘭ではどうにもできない。

ずっと会いたくて、離れたひとの事は思い出さなく過ごすことが出来るのに、ふとした拍子に彼女の癖や仕草が、ダブる。

同じ秘密を共有し、お互いしか頼ることの出来ない運命の中生きていたこともあった所以か。

「あなたは確かに検査の意味以上の言動はしなかった。そして蘭さんと幸せになって、それが私ののもぞみでもあった。

でも奈々を知ったら、あなたはきっと責任を取ろうとするだろうから」

彼女の平坦なつばやきは、耳にひとつひとつ捕らえるような感覚にさせる。

でも、何も言わせないなにかがそれにはあった。

遮断された外の音がとどめもなく、もう地平線は濃紺にゆらみがかっていた。

でも頭の中には帰るなんて選択肢も本能も形式的なモノも思い浮かばなかった。

「あなたが結婚した以上は、奈々は私の子供だから。生みたかった。」

それで今までなんとかやってきたわ。あなたがいなくともね」

あなたは何の関係もないのだから、忘れて早く帰りなさい。

そう暗に言っているのが悔しい。

「・・・俺の子供でもあるんだ。このまま何事もなくとか・・・
出来ねえよ」

ゆっくり呟いた。

「でも・・・おまえに会いたい人、たくさんいるから。

俺もずっと会いたくて、会えて、今日・・・嬉しいよ」

月日の流れは飾らないことを身につけさせた。

思っているままのことなら、ああいえばよかったいわなければよかったなんて後悔はしなくても済むから。

「じゃあなに？ 別れて私の所にきてくれるとでも？」

「そ、そーゆーことじゃ・・・」

「無理でしょう？」

諦めにも似た声色は、俺を責めるようでもある。

彼女にそんな意図はまったくくないのだろうけど。

責めてくれたらいいのに。

関係をもつてからのうのうと他の女と結婚して。

普通じゃ殺されてもおかしくない最低な男だ。

『分け隔てない優しさは、囚人にとってもっとも残酷なものよ』

いつか、子供の姿の時に言っていた言葉がふいにリピートされた。

「なあ、じゃあ。」

「なに？」

「俺のこと、好き？」

秋にふく冬色を帯びた冷たい風のように彼女は微笑む。

目を奪われる。

「あいしてるわ？」

躊躇わずに自然に、そういつてくれる彼女が、俺も好きだと思った。

「・・・嬉しい」

そう微笑めば、なんだかとても幸せになった。

「女の子にもてて嬉しいって？ ふしだらね」

「いやそーゆーわけではなく」

「最愛の奥さんがいるんだから。ここに来てはいけないの。さあ、もう帰りなさい」

ちようどがちゃりと、玄関のドアノブが回る音で奈々が帰ってきたことを知る。

「ただいまあ。じゃがいも買ってきたけど今日カレー？・・・あ、おにいさんまだいたんだ。ね、お母さんこのひと送っていい？

友達がファンなんだよ。だいじょうぶ余計なことはいわないから」

お母さんを調べに来たとか余計なこと言っちゃ駄目よとか、送るのは駅までよ、なんてやりとりのちに、奈々と外に出された。

ちよつと気まずい沈黙。

沈黙での安心は宮野とでしか共有できないものだど、離れたあとに気付く。

「・・・ねえ」

「ん？」

「わたし、おにいさんのこと、ずっと前から知ってるような気がするんだけど、なんでかわかる？」

「・・・わからない」

反対側の空が、紅く染まって雲を送り出していた。

「夕日、ビルでみえないね」

「うん」

「雲はあかいのに、不思議だね」

「・・・うん」

頷くことしか出来なかった。

「ちょっとだけ、最後のほう私、お母さんと話してたこと、きいたよ」

「え？」

「お母さんが好きな人って、おにいさんだったんだね」

いつも、いいひとがいたら私に遠慮せずに考えていいんだよって
いうと、もう逢えない好きなひとがいるからって。

寂しそつに笑うんだよ、と奈々は石ころを蹴りながら俯く。

「わたしでつきり、それはお父さんのことかと思ってたんだけど」

「・・・そうか」

心から愛してくれていることが、さっき会えてわかった。

どこまでもやさしくて、どこまでも不器用な奴で。

こたえたいと思う自分がいる。

だけど宮野は許さない。

自分で勝手に思い込んだ十字架と共に、またどこかへ泡のように消えてしまう。

そんな哀しい確信がある。

それなら、このまま何も知らないようにこれからも過^{すご}していたら。

宮野も傷つかないというのなら。

それしか、今の自分には考えられなかった。

「おにいさん、ほんと罪な人だよ」

「うん」

「あんなにいい女の心盗^{ぬす}んじやって。返してよ」

かえしてよ、だなんて。

「やだね」

即答した。

気付けば人の群れが駅付近のものへと変わっていった。

ふいにくると元来た道のほうへきびすを返す奈々を呼び止めても、その小さな後ろ姿は見る間に人混みに流されてしまった。

インカローズ（後書き）

なんとなくいちばん気に入っている話です。やっぱり独白っぽい綴り方があっていと思うのさ。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

プレイオプカラー（前書き）

志保さん欠場。

プレイオプカラー

足取りがやたら重く、気付けば自宅のドアノブをまわしていた。

夕食の匂いがあけたとたん香ってきて、そういえば俺腹減ってたんだよな、なんていまさら気付いた。

「おかえり、新一」

エプロン姿の蘭がにっこり笑顔でかばんを持ってきて、とりあえずメシにありつきたいのでメシと答える。

後ろで脱ぎ捨てた靴を揃えてくれていた。

ありがとうと言う余裕もなかった。そんな自分が嫌だと思っても改善しようとはしない。

「おそかったね、今日」

「・・・ちよつと長引いちゃって」

「おなか空いてるでしょ？今日ハンバーグだよ。刻んだエビ入れてみたんだけど、出汁がでて美味しいの！」

おかわり用意してあるからね、と台所へ走っていく蘭を、つい立ち止まって見ていた。

違和感はどうしようもないだろう。

19歳のときに元の体に戻ることが出来、結婚したのは20歳の誕生日の時だった。

それから工藤家でふたり、まだ子供もできないがそれなりに平凡と暮らしている。

蘭のほうは近くの空手教室で臨時に教えに行ったりするほかは専業主婦。

いつも明るい笑顔で出迎えてくれるのは、癒やしでもある。

でもどうしても、さっき目に焼き付いた彼女の涼しげな顔がだぶってしまった。

ハンバーグは相変わらず美味しくて、沸かされたお風呂にもゆっくり入って、書類を整理して、ふらふらと寢床へ向かう。

このままおきていると色んな事、考えて堂々巡りになる気力もなかった。

寝てしまえば何もおもわなくて済む。

蘭との子供ができないのも、俺がそうそうにひとり、寝てしまうこともある。

逃げているのかと問われればうなずける。

シングルのベッドがふたつ、その左が寢床なわけなんだが。

どうも膨らんでいる。

それが蘭だと気付くまでに、ずいぶんとかかった。

「・・・蘭？」

「新」

長い黒髪が丸い目を覆い隠す。

切なげにみつめてくる蘭に、首を傾げた。

「どした？」

「今日、排卵日なの」

「え？」

きつぱりと告げたその声には迷いも何もなかった。

「新一、いつもすぐ寝ちやうから・・・今日こそはってきめてたの」

「蘭、俺、疲れて、」

「いつもそうじゃない。疲れてるから休みの日って、休みの日なんて探偵さんにはないのに。」

子供、ほしくないの？」

責められているような気がする。

たしかに責めているだろう。

結婚して五年だっていうのに、ろくに相手もしてやれなくて、曖昧に先延ばしの旦那になって。

ぎゅっと手のひらに爪が食い込むほど拳を握った。

「ほしくないわけじゃないよ」

ベッドの横に腰掛けて、たたずむ蘭を抱き寄せて囁いた。

「もうちょっと、待って欲しいだけ」

こんな言い訳みたいな理由、通じるものかわからないけど。

待つて欲しい。

それは本当。

深層心理ではもっとなにかあるのだろうけど、言葉にするところではこんな常套句しか浮かんでこない。

力なくゆっくりとうなずくそれに、ひどく胸が痛んだ。

いままで我慢させてきたのは俺なのに。

「・・・わかった。疲れてるのに、ごめんね」

静かに、腕から立ち上がってするりと抜けていく後ろ姿は、ドアの向こうへ溶けていった。

「・・・というわけでして」

ひととおり、多少作り話と誤魔化しは混ぜておいて、そんな彼女の話をした。

「そんなことがあったとは．．．驚いたろう」

「ええ、それはもう」

「子供がいることは知っていたのだが．．．調査など愚かなことはせずに済んだ、礼を言う」

ゆっくり下げる頭。

「いえ。でも、相当息子さんに付きまとわれて迷惑しているようでして。今後このような事があつたら訴える、なんてことも言うておりました」

「訴える?!」

ぼつてりと垂れた目が驚愕に見開く。

さすがにそこまで被害があるとは思ひもしなかったのだらう。

俺だって、訴えるほどだなんて考えていなかった。

まあ彼女の脅しである確率も高いわけだが。

じゅぐじゅぐと灰皿に煙草を押し付けて、また新しい煙草に火を付けた。

「あの馬鹿息子めが、いちど言っておかねばならん。こちらからも謝罪の意を伝えておいてくれないか」

ちつと舌打ちのあとに、まずいことをいいだした。

「いえ、でもちよつと事情がありましてあまり尋ねることもできないんです。連絡先も知りませんから」

「個人情報を探ることなど探偵にとっては専売特許のようなものなんだろう?」

なおも言及せねばならない、これが社長つてものかと思うような

押しの強さ。

でも俺ももういちど会いたかった。

あれで終わりになんてしたくなかったから。

「では．．．伝えてはおきますが、きちんと息子さんの行動も制しておくようにお願いいたします」

「もちろん。では渡した謝礼金のぶんで託せるかな？」

「はい、十分です」

煙草がこんもりと盛られた灰皿を残して、笹野は去っていった。

プレイオブカラー（後書き）

蘭姉ちゃんともっといちゃこらさせるつもりでしたのに・・・私の
中になにかが蠢いていたのでしょうか。
かなり泥沼までいきそうです。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

バイカラー（前書き）

長めです。志保さんにご登場願えませんでした。

バイカラー

俺は夢を見た。

彼女と奈々が手分けして買い物袋をぶらさげながら、家路をたどっている。

ささやかな笑みと共に、普通となんらかわらない仲の良い親子の光景で。

それだけだった。

自分の視点は1カ所に固定されていて、だんだん小さな背中と華奢で細い背中が遠のいていくのを見つめているだけで。

叫びたかった。

でも喉が何かに張り付いたようにかすれて声が出ない。

見える世界も動かない。

その背中では景色の中に溶けていく。

もどかしさと焦りが体中を冷たくしていく。

夢だと頭ではわかっているのに。

心では消えていく自分の感覚をひきとめようとかきむしっている。

この現実感は何だ？

ベッドから跳ね起きたら、汗で寝巻きがびっしょりになっていた。

ふるふると首を振り回してまわりを見渡して、頭がぐわりと痛んだのを機に止めた。

じとじと心地悪い手のひらをぎゅっと握りしめる。

じいじと毎日、こんな夢を見る。

朝の光がたゆむことなく白いレースカーテンから降り注いでくる
眩しい寝室の中。

蘭と一緒に起きて、おはよの挨拶が始まって、夜闇を閉ざすた
めのカーテンをひいて、一緒に眠りに墜ちる。

そんな部屋なのに。

罪悪感と揺れる気持ちで闘ぎ合う自分が恥ずかしくて、最低だと
思った。

「俺、バカだよ、」

慰めるように罵ってみても、言葉の力は今たいしたものをもたらさない。

面倒な仕事を片付けて、昼が過ぎないうちに電車に乗った。

線路の上を正確に走っていく車両が家並みのなかをすりぬけるのを見つめながら、降りた先は宮野のいる街だった。

今日も障害物のかけらもない空。

あんなに綺麗に見えたのに、最近はただ虚無的なものしか感じな

い。

気がついたらアパートに来ていた。

マジかよ。

俺の足はいったいどうなっているのだろうか、見つめなおす。

「おにいさん？」

呼ぶ声が聞こえて、ふと振り向く。

「どうしたの？」

それはランドセルを背負った奈々だということに気付いた。

「奈々ちゃん？」

「奈々ですが何か。おにいさんどうしたの？お母さん待ちっ。」

「・・・分からない。気がついたらここ、来てた」

そう言うところと笑って奈々は言った。

稚拙なたとえだけれど、言うなればダヴィンチの絵画洗礼者ヨハネを思わせるような笑みだ。

それはとても宮野に似ていた。

「ならおにいさん、ちょっと私につきあって」

小さい背中にこのことついてきた先はどういうことかファミレスでもなんでもないこぢんまりとした喫茶店だった。

喫茶店コロラドと称された看板を見上げて、ガキが来るところじやねえだろと少し呆れた。

だけどそういうセンスも宮野から貰いつけたものがおおかた占めているらしい。

カウンターが7つほどとテーブルが2つ、客もくたびれたスーツの背中を丸めている疲れた人間がふたり。

その寂れた空気を払拭するほどのインテリアが目を引いた。

ブリキのおもちゃ思わせるものがところどころに施されていたりなんかして、それは椅子やカウンターが青と赤、黄色などの原色で統一されたものだったりようじ入れがそれこそシックな木製のミニカーだったり、子供のおもちゃ箱をひっくり返したようなこまごまとした可愛いインテリアだ。

しかしそれは統一性を持っているわけでもなく、たぶん古物屋だかゴミ捨て場なんかで拾ってきたものだと思えるものばかりだった。

だけどそれは、まだ見ぬものが隠されているのではないかと、子供の頃によく感じていたきらきらとした宝石のような心が浮かんでくる。

夢があるっていつんだろっな、こっいつのは。

センスのいいものを選ぶことに長けた人間がいる。

それは分かった。

ついでに店全体を満たす香ばしい豆の香り。

美味しいコーヒーが飲めそうだと、期待度がぐんと高まる。

「気に入った？」

「ここ、好きなんだ。」

「こんなところ、よく見つけるね」

「いいものをみつけるのが上手いのは母さん譲りだからね」

「言ってる」

軽くせせりあいをしながらカウンターの真ん中に並んで座った。

背は肩ほどもなく、背筋を伸ばして座っているとところが可愛らしいと思う。

マスターと呼ばれたひとは色白の老女だった。

昔は神々しいほどの美しさだったことは容易に想像できるような、そんな異国風の老女。

西洋人形のような真つ青な瞳が俺を一瞥し、奈々に微笑みかけた。

「なあに、彼氏？」

「そうみえる？」

「あまりそういう風にはみえないわね」

「そりゃそうでしょう」

鈴虫の吐息のような声とメゾソプラノの耳にやわらかく馴染む宮野譲りの声との絡み合いはなんとも心地いいものである。

「なにか飲まれますか？」

「え？．．んじゃあコーヒーを」

「コーヒーですね」

じゃらじゃらとそろばんの玉に色がつけられたようなのれんをくぐり老女は消えていった。

最近、厄介な仕事もあまり入ってこない。街を歩いていても事件と遭遇しない。

それが願うべき平和の姿なのだろうが、それを俺の中の好奇心と

ある意味での残虐心が許さない。

命よりも大切なものはない。

命を蔑ろにするやつは人間として最低である。

どんな理由があろうとも、殺してはいけない。

若い頃はそんなことを本気で思っていた。

殺人を犯した犯人に、恥ずかしげもなくそんな戯れ言を言い放っていた。

『あんたあれでしょ、無駄にアタマいいから学校の勉強とか同年代とかくだらないんですよ。』

その欲求不満を人の命と引き替えにやっどこさ満たしてるわけだ』

老女とも言えない依頼人の母が、ぼそりと横で呟いたときに過ぎ

た風の匂いとその声が、耳と頭と心臓にこびりついて離れない。

そのひとは依頼人が探していた恋人を、殺していた。

なぜ殺したと。

そんな疑問は思わなかった。

思えなかった。

ただその俺に向けていったかも分からない言葉に意識を捕らわれていた。

それからときどき、果てのないように見える空や透明なガラス玉なんかを見たときに、攫われたように考える。

なぜ人を殺してはいけないのか。

殺そうなどとは毛頭思わない。

殺す人間の神経が理解できない。

ただわからなくなったのだ。

あれほどに信じていた概念が、他人のひとことですらどうしても型に合わなくなったのである。

「おにいさん」

声にはつと焦点を合わせてみれば、ことりと分厚い白いマグカップが目の前に置かれていたのに気付いた。

「早く飲まないと冷めちゃうよ」

「えっ・・・あっ、うん、」

もうもつと湯気であたりを潤わせていく。

ゆっくり両手でかたむけて口に流れ込んできたコーヒーの香りが鼻孔を駆け抜けていった。

深く深く体の隅々まで、足先から指先、髪の毛までも染みこんでいくような安心感。

「おいしいでしょう」

「うん。．．とても」

「おいしいの。このまま眠りながら逝っても大丈夫なんだと、そう思えるような重さがある。」

お母さんの淹れるのがいちばんだけどさ

音もなくすすりこむ奈々の横顔は嫌に大人びていた。

幼さが残る顔なのに、その大仰な言動を滑稽だと笑えるものもない。

「うまいよ。お前の母さんの淹れるコーヒーは」

また思想のなかに深く沈み込む。

横目でちらりと、奈々は見つめた。

まったくなんなんだかね。このひとは。

テレビや新聞なんかでよく隠し撮りされている整った横顔が今、わたしの目の前で思いふけている。

大人びても幼さもない、たいせつなものが抜け落ちたような横顔だ。

わたしもなにか吸い取られていきそうで、目を反らした。

このひとがあらわれてから、お母さんはなにかおかしい。

ご飯を食べているときでも洗濯物を畳んでいるときでも一緒にテレビをみているときでもお風呂に入っているときでも、

動かしていた手がふいに動きを止まってあさつての方向をみているお母さんなんか、みたこともなかった。

そうだ。

このひとの瞳は、そのまま今のお母さんの瞳でもある。

色は違っけれど、中に秘めているものは同じ。

身を焦がすほどに求めるものを、いつも探している。

さっきなぜだか家の前で突っ立っていたおにいさんを見つけて、チャンスだと思った。

どういう関係なのか問いただそうと。

問いただして、お母さんになにか害を及ぼすものであるならば、
しかるべき対応をするつもりだった。

だけとおなじ瞳を持っている。

これじゃあ一方的に追い返すこともできないなと、そう思った。

「
ねえ
」

「
ん？
」

「お母さんと、どっいう知り合いなの？」

「..ひひひひひ」

ぱちくりと目を瞬かせ、ゆっくりとコップを磨いているマスター
に向き直った。

何、そんな言えないような関係なの。

お母さんじゃそんなこともないだろうけれど、ただの友達でも知
り合いでもないってことは分かる。

今この男は、子供のわたしにどううまく誤魔化して言おうかと考
えている。

「・・・どう言えばいいのかなあ。昔、恋愛関係より深いとこ
で繋がってた感じ?」

「恋愛関係よりも?」

「うん。俺は奥さんいるからさ」

「はあ?」

「幼なじみ。そいつ一筋でさ、よく宮野みたいな奴に傾かなかったなあと思うよ」

このひとのすねに蹴りでも入れてやろうかと思ったほど軽い笑いだった。

だけど目は少しも笑っていないで、上げかけた足が力を失う。

「どちらかが滅びればどちらかが救われるような犠牲的な関係じゃなかったと思ってる。宮野はそう思ってくれてなかったみたいだけど」

この人は辛いんだろうか。

笑いで誤魔化さなければ崩れてしまいそうなほど、脆弱に哀しいのだろうか。

頼んだコーヒーがミルクを入れたせいでとろとろと渦をまいている。

啜ってみた。

蕩けるほどに甘い味が頭を劈いたあとに、ほんの少しの渋みが舌にしみついてくる。

この感覚が堪らなく愛しい。

「素敵ね。運命共同体って所かしら」

マスターの水のような瞳がにっこりと細められる。

「滅びるときも栄えるときも、同じ運命を共にする組織や関係のことよ」

「滅びるときも栄えるときも・・・」

ドラマチックなことしか浮かんでこないけれど、現代にもそんなことがあるのだろうか。

探偵として活躍しているこのひとの生死の可能性は限りなく振り子時計状態だろう。

「恋愛なんか関係なくても、すごく大切な奴だよ。だから、きみがいるのを知ったときには、すげえ吃驚した」

「うん」

「でもきみは、お母さんのこと好きだよね」

「もちろん。いちばん大切」

同年代と戯れるのが面倒な私は本に埋まるように生活している。

それを理解してくれるのは先生でも同級生でもない、お母さんだけ。

世間の常識を当てはめて、ずれるところがあれば直すように強制する。

今の社会はそればかりって、二桁も生きてないのにおかしい言い方か。

「俺も大切だよ」

「え？」

「好きだ。大切」

迷いもなくきっぱり言うから、

「恋愛で？運命共同体として？」

「ん．．．それはわからん。模索中」

そう言ってコーヒーをぐっと飲み込んだところを見て。

やっぱり殴り飛ばしたくなるひとだと思った。

男女の関係というものは、どうしても恋愛を疑わずして通れない。
そんなものを忌み嫌うようなことは言っていないけど、どこかそんなものが言葉尻にある。

男と女の関係は色恋沙汰だけじゃないこともある。

きみにはまだ分らないと思う、宮野と俺のあいだのことは。

わかってる、それくらい。

すべて知ろうなんて思わない。知ることが出来るとも思わない。

でもねおにいさん、そうは言っけれど、現にお母さんはあなたのことを愛している。

色恋沙汰以外の何者でもないわ。

そうだね。

でも最初はこのなんじゃなかった。お互い、恨み合い罵りあうような関係だったさ。

罵りあうような？

驚いた。

ほんと、事実は小説より奇なりってことか。

フィクションはリアル性に欠けている。

たとえきみが宮野の娘でも、昔のことは言えないしわかりもしないだろうな。

くすくすと笑う。

軽やかな吐息をうまく蹂躪させている。

あっそ。

わかんなくていいよ。分かる必要もないし。

ただ、もしあなたがお母さんに害を及ぼすものだったら、近づかないで欲しいって、そう言いたかっただけ。

「おやおやこれはまた、頼りになる騎士で」

まったくすすくと笑っている。

黒いものが身体の奥深くからうねりながら心臓を汚染していく。

憎悪なのか殺意なのか。

そんな重いものじゃなくて、ただ単にむかつくだけか。

「だけど、確かに君の言つとおりかもしれない。宮野にとって俺は、罪の象徴だろうから」

「罪．．．」

罪。

お母さんの過去に、何か大きなものがあることは薄々感じていた。

それがこのひとに繋がっているのか。

じゃあなんでお母さんはあなたのことを。

アンビバレンス。

図書館で借りたか中古屋で譲って貰ったか、心理学の本にそんな用語が書かれていた。

ある対象物に、相反した意識をもっていること。

愛情と憎しみを同時に併せ持つような、そんな愚直な感情のことをいう。

私の考えたことを見通しているように、碧い目がきらりと光った。

ぞくぞくする。

お母さんにたかる害虫を追い払うことよりもこの掴み所のない男に怯えるよりも、眩しさに目が潰されそうな未知の世界にぞくぞくしていた。

そうだ。

本をはじめて読むときの感覚によく似ている。

まったく知らない文字の数々が物語をなしていると思うと、押さえきれない歓喜が全身を貫き歓声へとかわるような。

ねえ、おにいさん。

このどうしようもなく間延びした一桁の人生に、やっと何か亀裂が走った。

ショーのアンコールは、本編よりもとびきり高度なものじゃないとね。

観客の目はどんな豚よりも肥えているんだから。

バイカラー（後書き）

長めでした。奈々ちゃんと工藤氏の関係はここらへんで確立させておきたくてこうなったお話です。シユールでちよつと中二病気味な奈々ちゃんと、志保さんと蘭姉ちゃんの間で揺れている自分への羞恥で押し合いへし合い工藤氏。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

ルチルクーツ

「宮野さん、宮野さん！」

肩を揺すぶられ、名前を呼ばれ、ふつと覚醒した。

ゆっくり振り向くと、困惑したような掃除係の北河原さんの顔がぬつと視界に入りちよつと吃驚する。

そして今、やっと今仕事なんだという自覚に至った。

「どうしたの？ ばーっとしちゃって」

「いえ、特に何も」

「特に何もじゃありませんよ！ あんなに仕事に厳しい宮野さんが意識どっかに飛ばしてるなんて普通じゃないわ。 あ、何か悩みがあるのね？ いいわよ、どんどん言って。 人生経験の年数だけは長いんだからね」

いいながらどん、と胸を叩く北河原さんに、少し笑ってしまった。

関わりのない人間にも隔たりもなく接するというのは、中高年の女性の最大の美点だと思う。

ただし噂話と他人の不幸話が好物だというのも多くの女性に見られる性癖だ。

優しい目の奥にも、好奇心が潜まりきれずずずずしているのがすごく分かる。

「大丈夫です。相談したいことがあったら、すぐに言っわ」

「あらそう？遠慮しないでいいのよ、遠慮なんてオバサンにはいらないんだからさ。わかったわね、何か困ったことがあったら我慢しないでいいのよ！」

そう言いながら離れていく丸い背姿を見送って、資料の端をとんとんと揃えた。

何もしていないのに肩が凝る。

いつもは何もしないなんてことはないけれど、ずっとかじりついていた研究がやっとのことで終わってフロア一同、少し気が抜けている。

いつもなら渴のひとつでも入れるところではあるが、私も疲れた。

少し外の空気を吸って、力を入れ直そうとほこりっぱい階段を上り屋上に出た。

缶コーヒーを自販で落として、誘われるようにフェンスに近づいた。

空を見上げれば飛行機雲。

たどっていくとだんだん消えていく。

もどっていくと少しずつ滑っていく飛行機が見えた。

真っ青の雲ひとつない空よりも、雲がどろどろと渦巻く昼下がりの空が好きだ。

適度に雲が太陽を遮ってくれていると、眩しくないし紫外線の心配も減る。

眩しすぎて痛い。

それは人間にもいえるんじゃないだろうか。

奈々はそんなことを言っていた。

あんなに大人びたことを言うのは素でなのか本で見掛けたのかなのかは分からないが、あれをいった時の表情は妙に寂しげだった。

思考を止めたのはそのせいだった。

「宮野さん」

背筋に悪寒が走る。

一瞬にも満たない間だった。

「宮野さん、どうしたの？こんなところで」

ぺたぺたと裸足で大理石の上を歩くような下品な音を立てて、そのひとは近づいてくる。

「仕事熱心なのに。あ、何。なにか悩みでもあるの。それだったら相談に乗るよ。遠慮しないで」

軽く弄ぶように耳元に囁く声が汚らしくて、それを払う。

「どうしてでしょうね。北河原さんに同じこと言われたけど、あなたにいわれてもちっとも心が暖まらないわ」

むしろ寒気しかない。

吐き捨てた志保に、笹野はくすくすと笑った。

「なかなかキツイこと言うよね、宮野さん。おれ、言われ慣れないから結構へこむわ」

「あなたが大切に大切に純粹培養温室で育てられたしっぺ返しが来ただけでしょ。あなたが来たせいで息抜きがだいなし」

「もつといい息抜きさせてあげるよ、どう？今日」

はあ、とどこまでも長いため息をついた。

同じ事ばかり繰り返して。

整って、でも工藤君のような真っ直ぐではない屈折した茶色の瞳を見据えた。

「お父様からいわれなかった？」

「お父様？ ああ親父ね。いわれたよ。昨日の晩ずっとその話でさ、参ったよ」

「その話が理解できたのなら近づかないでくれる？ まさかあなたみたいな学校の成績だけが取り柄のおぼっちゃまが理解出来ないはずはないわよね」

「理解はした。だけど、近づくなとあれではいつていなかったし、ただの脅しだけだったね。」

脅して引かせようっていう社会常識的な方法が純粹培養温室で育てられたおぼっちゃまに通じるとは宮野さんらしからぬ甘い考えだ」

疲れる。

「親父は一時でもおれと宮野さんを結びつけてもいいって思ってたんだよ、その考えを復活させるなんて簡単だと思わないか？探偵の知り合いだったかなんだかしらないけど・・・ああ、工藤新一とかいったっけ」

ずきん、と鼓動の戸惑いが鼓膜を襲う。

表情にきつと出ている。
私としたことが。

その厚ぼったい唇で、かすれた声で、その名前を言わないで。
積み重ねてきた過去も、彼の存在もすべて穢されるようだ。

あれ、と顔が近づいた。

男性用の香水の匂いにむせる。

「何、工藤新一に思い入れでもあるの？ てゆうかどんな知り合

い？」

「昔相棒だったひと」

答えると目を丸くした。

「相棒？ってことは彼氏？」

「ふふん。女をたぶらかす淫らな白狐のようだといってもまだまだおこちゃまね」

恋愛だけでは語れない関係が、この世には溢れている。

女に関しては百戦錬磨と影でいわれているひとでも、それは恋愛限定か。

「でもあのひと、いつだったかフライデーされちゃってたけど、奥さんいたよね。黒髪のかawaii子ちゃん。確か米花町で空手教室の臨時講師やってるんだって」

「ええ。可愛いからって近づかない方がいいわよ。プロのボクサーを一撃でブラックアウトさせたこともあるらしいから」

「うえっ、こわ」

幼なじみをずっと一途に思うあのひとは、むしろ愚かにだって見えた。

そんなひとに取り込める余地なんて、あっても猫の額ほどもなかった。

だけどその余地に、無防備に飛び込んで逃げ出していったのは私だ。

「でも奥さんがいよーがなにがいようが、好きになるのは勝手だからね。かなわない恋っていうの、宮野さんに超合うわ。夢げでさ。あ、おれ男女間で友情関係が成立するっての、信じてないから。レズでもホモでもないかぎり、どこかに甘いときめきを求めるようになる」

「あなたの仕事以外の意見なんか毛頭興味ないわね」

「それは身に余る光栄でございます」

意味の分からない色恋沙汰の話はうんざりだと、それは無視して、飲みきった缶コーヒーを握って階段へと向かおうとして。

「ねえでも、」

なんの前触れもなく手首を掴まれ身体が固まる。

近づいてくる熱い吐息。

動けなかった。

交わせなかった。

「おれ、本気で欲しいんだよ、宮野さんが。手に入りたい。遊んでるだけとか、思わないで」

それだけをかすれた低い声で呟き、缶をむしり取って階段の扉へ消えていく。

よくわからない胸の鼓動が、不安だった。

ルチルクーツ（後書き）

笹野さん登場（笑）結構気に入っているオリキャラなんですけど、なんか名前のあとに（笑）をつけたくなる。↑なんでここからどんどん輪のように、志保さんと工藤氏、蘭姉ちゃんのかに入ってくる重要なひとです。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

エンジェライト

気付いたら手の中の缶が潰れ、尖って手に刺さって血が滲んでいた。

ひりひりするけれどこれぐらいの痛さが気持ちいいのでこれでいい。

閉まったドアの向こうに、宮野さんはたぶんいない。
追ってこなかった。

「追ってきてくれるよーな人じゃないよな・・・」

そりゃそうだ。

生優しい人じゃないの、骨の髄まで知ってるつもりだし。そういう女だったのならここまで夢中にはなってない。

揺れてくれる。

たぶんね。

興味ゼロってわけじゃないってことだ。

ほんとにどうでもいい奴に、あんなに磨き掛かった口数多めな皮肉は披露しない。

今はそれだけでいい。

女をたぶらかす白狐だとか純粹培養温室育ちだとか、そんなふう
に認識してくれただけでも一歩進めたと思う。

次は工藤新一だな、と思った。

名前をいったときのあの動揺ぶりと関係を語ったときのどこか誇らしげな様子は、十分に探る必要がある。

宮野さんがあんな完璧キザ男っぽいのがタイプなのは意外だけど、恋敵は早めに近づいておくに限る。

これからだ。

これから始まる。

始まりの広がっていく開放感は、何物にも代え難い。

ひゅるると陽気な口笛を吹きながら、笹野東海とうみは階段を下りていった。

奈々は鍵が解錠される音をきいて、ハムレットから顔を上げる。
その顔はすぐに歪んだ。

帰ってきたお母さんから、あの忌々しい男用の香水の匂いが微かにしたのだ。

鼻について自惚れで、それでいて吸引力が強い。

そのままあのひとを表しているようだ。

臭い。

不快だ。

ただいまと鞆を下ろすお母さんに、何かあったの、と聴いた。

とくに何もなかったけど、どうしたの、なんて返ってくる。

心配させないように言い聞かせているような響きが含まれていた。

なにかあっても、言うようなお母さんじゃないよね。

そう零してしまいそうになるのを堪える。

言ってもお互いに利益は得られない。

あのひと絡みのことには、私は何も力になれない。足手まといに
さえる。

歯がゆいけど、人には立場というものがある。それを踏まえるこ
ともこの世の道理だ。

だから頼んだのだ。

約束したゆびきりを忘れないように、ぎゅっと小指を握りこんだ。

だけれどもどうだろうか、とつい呟いてしまった。

むこうでは蘭が、金曜の洋画に意識を奪われている。

訊かれて無駄に心配されるようなことはないな、と新一はほっとした。

虚無的な気持ち、奈々と話したことですっかりしたものになっていた。

不思議な魅力は、さすが宮野の血を色濃くひいているだけはある。

確かな不安は、今までの張りぼてのようなルールを曖昧にさせる。

でもそこから得る新しい疑問は、再生へのきっかけになる。

ほんとうに宮野に似てる奴だ、と思った。

それにしてもなあ、と接続語がまた喉の奥でひくつく。

『だいたいさ、読めたんだよね。おにいさんがうちんちに来た訳が』

『え？』

『お母さんに迫ってる男がいるの、知ってるでしょ』

真っ直ぐ突き刺すような目線に、嘘は通用しなかった。

『だめなの。私じゃ何も出来ない。お母さんをあのひとから遠ざ

けるのも突っぱねるのもシールド張ることだつてできない。
悔しいけど．．．守って。お母さんのこと、守って』

淡々と喋っていた奈々の手はマグカップをいたく締めつけていた。

その言葉に、思い出した駅での記憶が蘇ってきた。
今も鮮やかな記憶として、風向きや息切れした胸の動悸まで残っている。

『あいつは、．．．簡単に守られてくれるような奴じゃない』

守ってくれるんでしょなんて言うておきながら、守ってください
みたいなお姫様ではないと。

そう言い捨てていた。

『しってる。でもあのひとは、お母さんに取り憑いた寄生虫。こ
のままじゃ肥大化していくわ』

そうはいつでも。

『この世の関係が恋愛だけで括れないっていったの、おにいさんでしょ。守ることだって、いっしょだとおもっけど?』

そのままゆびきりをしてしまった。

小さい指の感触が、まだ残っている。

守ると言った。

あのころの約束は確かにいまも生きている。

限りなんてない。死ぬまでずっと。

昔は蘭との色恋事と推理にうつつを抜かして、気休めばかりいって、逆に心配させて負担をかけてしまった。

あのころよりは、器用に守ることが出来ると、そう信じたい。

いつだってあの言葉を嘘にしたくはない。
守り通せると、宮野にも奈々にも自分にも、証明したい。

目を綴じたら、眼裏に浮かぶのは遠く手の届かない場所にいる宮野の姿だった。

変わり始めたのは雲が途切れ途切れ浮かぶ闇夜だった。

エンジェライト（後書き）

笹野東海、奈々ちゃん、工藤氏の順で目線が変わりました。笹野息子の名前は東海です。とうみです。

最近志保さんがおでましにならなくて寂しいのはわたしだけではないはず！（w

ここまで読んでくださりありがとうございました。

エレスチャル

何をせずとも手が悴むような寒い日にはいつも思い出すことがある。

志保は手に吐息をかけて擦り合わせた。

あまり暖かみは増さないけれど、こうして暖めてくれた彼の真剣な表情が今も目の前にあるようで、また一踏ん張り出来る自分が甘くてあまり好きではない。

でもあの時間の記憶に頼ることは少なくなかった。

人間少しくらい依存しているものがあっただっていいだろうと心の中で言い訳をして、なんどでも手繰り寄せる。

あの身体の吐息の言葉の行動の、すべての熱さを。

彼の身体は異常なほど発熱していた。

獣が何かのように私の身体を求める彼の背中に、私も必死でしがみつく。

身体の欲望はいつまで経っても満たされることはなく、疲れも無視して逢瀬は続いた。

幸せだった。

触れあうことがこんなに幸せなことだと、知らなかった。

ぎこちなくも器用で優しい指先にとめどなく欲情して。

名前を囁きあいながら達して。

涙で視界が潤んできたときに、ざらついた感触が何かを舐め取ったのに、さらに涙が溢れてきた。

このまま溶けあってしまった方がいいのになんて、狂気じみた独占欲さえ今は押さえる術を持たなかった。

自分ではない呼吸の音を感じて目覚めた。
正面には彼のあどけない寝顔が手に触れられるほど近くにある。

カーテンの隙間から東日が差し、その道だけに朝が与えられていた。

それだけで嗚咽を漏らしてしまいそうなのを必死で堪えた。

自分は弱い。このひとの存在なしには生きられない自分になっている。

でも孤独であることが強さなのではないと教えてくれたのはこの人だった。

布団をめくった。

脱ぎ散らかした服が足下に丸まっていた。

どれが自分のものかより分けて、音を立てないように着る。彼の服は皺を伸ばして枕元に畳んでおいた。

キスでもしておいたほうがいいのかと思った。

これ以上は望まないと決めた自分が早くも揺らいでいる。

寝ている工藤君の肩がゆるやかに上下している。

生きている。

ちゃんとここで。触れられる世界に。

一人で勝手に安心した私は、静かにドアを閉めた。

どんより覆い被さる雲を猫の爪で引っ掻いたような空が薫る日だった。

よっこらせと余計なものを詰め込まなかったはずなのに膨らんだキャリーバッグを横に携える。

長く世話になっていた邸宅を見上げる。

それから自分のお腹をまじまじと見つめてから、振り返らないように歩き出した。

そのとき遠くから声が降ってきた。

「おい、宮野！」

この声に呼び止められて止まらない自分が可笑しくも愚かでもあると思った。

「何よ」

後ろを向いたままで答えた。

正面から向き合い続けられる自信がないことと、彼の表情がどん

なものか知りたくなかったからだ。

「・・・何処行くの？」

キャリアバッグを見て言ったことは容易に分かった。

「新しくつとめてる研究施設に三日くらい寝泊まりするから」

「研究施設？」

そんなこといつてたか、と疑惑に濡れる言葉を続けた。

「そういえば、ついにゴールインしたんだってね。結婚おめでと
う」

「・・・さんきゅ」

複雑なのかなんなのか。

声でしか隠された感情を判断できない。

でも振り向くわけにはいかない。

「なあ」

「何」

「こっち向けよ」

「だめ」

「なんで」

「振り向いて話すほどの義理はないわ」

「じゃあ俺が、」

とつさに身を引こうとして目の前に回り込まれる。

真剣な瞳が突き刺す。

痛い。とてつもなく、痛い。

整った口元が静かに動いた。

「俺がなんもおまえのこと分らないとも思ってるの」

「・・・」

「ちょっと馬鹿にしすぎ」

「大切なところがヌケてるじゃない」

「でもおまえのこと、他のヤツよりはちょっとわかってるつもりだけ」

「・・・」

無言になる。

「おまえがどうか行こうと、俺に止める権利なんてないけど」

ぎゅつと目を瞑った。

手に手が触れる感覚が研ぎ澄まされるだけだった。
それを振り払った。

「私はあなたの解毒剤の作用がほぼ完全に消えたことも保証した

し、何かあったときのことはちゃんと教えた。

「ここにいて果たすべきことはすべて果たしたと思ってるわ」

素早く言い捨てる。

耳が悴む。

耳当てでもしてくればよかったかもしれない。

目の前の気配が穏便になった。

何をいいだすかなんてだいたい予想はついた。

「ここに居る理由なんていらねえよ」

ほらね。

相変わらず綺麗なことばかり言う口だ。

それに救われたことも貶められたこともある。

うになった。

私は笑い出しそ

だってあなたは、存在が否定されたことなんてないでしょう。

ずっとすべてに恵まれて生きてきた人。

そんな口ならいくらでも理由は付けられる。

「じゃあ言い方を変えるわ。私がここにいたくなかった。それじやあなたのいう理由にはならない？」

「いたくない？」

ぴくりと眉が動いた。

「逆立ちしてもあなたにはわからないでしょうね」

「なっ・・・」

「中途半端な情で女を取り置きしておこうなんて浅ましいにも程があるわ。人のためなんて思ってるんでしょうけど私には何も知らない人間の戯言にしか聞こえないの」

言いたいことをひとしきり言っても、まだ苛つきは収まらなかった

た。

大人げない言葉が飛び出しそうになるのを飲み込む。

沈黙が空気を支配した。

ふと見上げた。

彼の頭が項垂れている。

さっきの生気が感じられない。

「きつかった？」

頬に手をそっと当てる。

冷たくなっている。

そこで初めて、雪が舞っているのに気付いた。
気付いたとたん、体中に針が貫かれたように寒さが増した。

顔を上げた工藤君の目は、捨てられた子犬さながら脆く崩れてしま
いそうな色彩だった。

「お前の言ってること訊くと、心のどっかが引つ剥がされるみた
いになる」

「語彙が乏しいわ」

「でもそっから新しく、皮膚が再生してくような、そんな感じ」

幼い表現がたどたどしく、愛しい。

気付くと彼の黒髪にうつすらと雪が掛かっていた。
手を伸ばすと、手首を掴まれる。

引っ張られて工藤君の口元に持って行かれる。

「ひゃっ」

指先にくすぐったく息が掛かった。

手を両手とられ擦られる。

「寒そう」

「・・・やめてよ」

「やめない」

「あなた結婚してるんでしょ」

「そういう・・・下心でやってるんじゃないから」

「馬鹿」

もういちど、繰り返した。

「ほんとに、馬鹿」

白く変化していく世界に目覚め、はっと手を引きはがした。
呼び止め腕を掴む彼に無理に微笑めば、だらりとコートの腕は力を失い自由になった。

そこで止めた。

この目で今見ているように思い出せる。忘れないように繰り返し再生していたためだ。

踏みしめたアスファルトには冬の匂いがする。

もうあの日から何度目かの冬だ。

———
それにしても。

頬に寒さが染みてくる。乾いて痛い。

あのひともあの子も、何を考えているのだろうか。

さっき、通りすぎた喫茶店のガラス戸の向こうに、奈々と工藤君が並んでいた。

何故あのひととあの子がいるのか、話し込む様子もなく沈黙している。

疑問が浮かんだ。

嫌な予感がした。

何かに回り込まれて、崩れもせずに色褪せていくような。

奈々も馬鹿じゃない。自分の明確な意志のもとに行動している子
だと思っている。

工藤君も昔関係をもった女、ましてや自分の子供と接触して何を
得るものがあるだろう。

吹き抜けた乾風あなじに震えた。

エレスチャル（後書き）

志保さん一人称。

ロジウムコーティング（前書き）

東海さん＋蘭ちゃん。

ロジウムコーティング

「ふんふんふん」

軽く鼻歌横目に鞆の中を片付ける蘭に、何か楽しみなことでもあるのかと聞いた。

空手教室の臨時講師の日よ、ご機嫌良く返される。

「なんでそんなに楽しみなわけ？」

「えっ、・・・あっそうね、生徒さんたちに会つのが楽しみなのよ、ほらすつごくいい子たちばかりだから。そう」

言葉と表情に狼狽が見え、何が何だかよくわからないまま玄関を出て行く蘭を耳で送った。

小走りで曲がり角まで来て、後ろに誰もいないことを確認すると急に力が抜けてきた。

心臓がまだどくどく言っている。

なんで私こんなに緊張してるんだろう。

隠すような事じゃないはず。ちゃんとさえいい。

あんな態度になったら変なふうに誤解されちゃうじゃない、私の馬鹿。

穴に入りたいような気分になる。

隙間に入ってくる冷たい風にきゅっとコートの裾をよりあわせ、マフラーをぎゅむっと巻いて商店街の方向へ歩き出す。

商店街を抜け並木道の川沿いに健康食品のお店があって、そのちよつと奥に空手教室はあるのだ。

ここの空手教室は、自分のレベルを磨くことよりも次の世代を育てることに魅力を感じ始めた京極さんが始めたものだ。

今はすっかり老若男女幅広くここに通っている人は多く大盛況し

ている。

顔見知りの子供に声を掛けようとした時、後ろに投げておいたマフラーの端をびっと引っ張られた。

ぐっと喉が締まる。不毛な不審者が何かかと思えるよりも先に手が動いていた。

マフラーを掴む腕を掴み返し、こちらがわへ引き寄せバランスを崩したところを倒しこみ馬乗りになる。

「堪忍なさい！」

腕を振り精一杯睨み付けた。

「いつて、蘭さん俺です俺、東海だつてば！いつててて」

「へ？」

うつ伏せで息を切らしている男の顔を覗くと、そこには確かに整った顔立ちの笹野さんがいた。

あわてて飛び退く。

「えっ、あ．．．ごめんなさい！ 私てっきり変な人かと思って．．．ごめんなさい！」

「いや、すいません、驚かせてしまつて。蘭さんこれから講師ですか？」

「へ、あ、そうですね。そうです。久し振りなんです」

ぺこぺこしながら乱れた衣服を整えて、穏やかな瞳を見る。
にこにこ笑っていて、怒ってはいないのを感じとりほつとする。

今すぐ背を向けなくなるような甘い胸の動悸を、確かに感じていた。

スポーツ雑誌によく記事を書いているフリーライターの笹野東海さんと会ったのは一ヶ月ほど前だった。

一世を風靡した京極さんがなんの兆候もなくいきなり引退し、始めた教室はその世界からすれば注目の的だ。

いろんな記者さんが来たけれど、頑固でまともに取り合わない京極さんに帰っていく人がほとんどな中で、唯一京極さんのお眼鏡（

？）にかなった人が笹野さんなのだ。

週刊のコラムのために、それくらいの頻度で取材に来る笹野さんは柔らかい物腰甘い顔立ちキザな言動三拍子のおかげでみんなから（主におばさま方）慕われている。

「やっぱり。最近姿が見えないから、体でも壊したのかなって心配だったんです。でも、大丈夫そうっすね」

「いえ、大丈夫です。ちょっと悩んでるだけで」

「悩み？」

いけない、と思った瞬間には目の前の表情が少し訝しい色に染まっていた。

「いや、たいしたことじゃないんです。心配はいりません」

慌ててフォローしたけれど嘘をつくのがヘタだとどこかで冷静に思った。

気にしてくれと言っているようなものだ。

そしてやっぱり笹野さんは怖れていたとおりのことをずばずば指摘し始めた。

「いつも週一の頻度で来ていらっしやるのに一ヶ月ほどあけましたね」

「・・・」

「それは少なからずダメージのあったものだと考えられます。そして今、悩んでいると過去形ではなく現在形でおっしゃられました」

本当のことを言ってしまうのもこのまましらを切り続けるのも躊躇われて、私は黙り込んだ。

それが肯定と取られてしまうことにも気付かずに。

「その悩みが肥大化したか否かとしてもまだそれは解消されていないのではないかと思ったんですが・・・ってちよつと2時間サスペンスっぽい感じで。」

旦那さんもこんなふうに謎解きとか、するんですよね」

旦那さん、という響きに背徳感という響きを感じるのが何故か分からない。

『もう少し、待ってくれ』

そう真剣につぶやいた新一の声が体中にまわりついている。

呪いのように離れない。

何を待てばいいの？

もう結婚してるんだよ。学生じゃないの。

気持ち？

気持ちが、私と子供を持ちたいと思わなかったってこと？

それともあのときだけ、ただ気分の問題？

そんな一時的な声色じゃなかった。

ずっと新一の傍にいたのに、何もわからない。

泣きそうになっていた私を心配そうに見つめていた笹野さんに、心の壁が崩れていった。

急に泣き出した女をなだめながら近くのホテルに連れ込むのはけっこう簡単だった。

弱ってる女つてのはチヨロいもんだな。

日頃からいい人って認識させとけば、もたれかかってくるのも時

間の問題だと思ってたけど大当たりだ。

笑い出しそうになるのを必死で堪えて、脱力している体をソファに座らせた。

「ここなら泣いても恥ずかしくないですから。ね？」

優しく囁いて、嗚咽する背を一定のリズムでさすってやる。
幼い頃によくあやしてくれた母の手だと、錯覚できるように。

本当に世間知らずだというのがはじめて会ったときから揺らがないイメージだ。

自作の安っぽい雑誌もうさんくさいスポーツフリーライターも怪しまないのは・・・まあ温厚マダムキラークアラを作っておいたことも影響しているか。

そんないまどき珍しい女をたぶらかすのは苦勞するかとも思ってたけどこんなに軽いもんだと思わなかった。

いざという危機はだいたいお得意の空手でどうにかなってきたん

だろうな。

疑うことも怪しむことも、ここまで生きてくるに必要ななかったわけだ。

ふん。

思考が荒んでいく。

危ない危ない、これじゃ隙ができる。

感情は差し挟まない。関係有るのは事情だけだ。

ふと気がつくと腕の中の女が涙に濡れた顔でこちらを見つめていた。

そそられないこともないけど、やっぱり簡単に弱みを見せてくれない宮野さんの涼しい顔のほうが何百倍もいい。

そんなことはおくびにも出さず、ん？と目で返す。

「私……泣いちゃって面倒かけちゃって、すいません」

「いえ、こんな蘭さんを放っておく輩がいたとしたらそいつはかなり異常な奴ですよ」

自分で言っておいてなんだけど齒が浮くようなせりふだ。

女はしばらくして視線を戸惑ったようにきよるきよるさせてから、零した。

「・・・どうしても駄目なんです。あれはたんに気分の問題なんだった、もう少しふたりでいたいって思ってるんだよねって、そう信じられたら楽なのに」

そう言っただけ、また嗚咽を続け始めた。

だいたい事情が読めた俺は、さするのをやめて肩を抱いた。

やさしく、軽く、ぎゅっではなくそっと。

物足りない。

そんな感情をかすかに見せる丸い瞳を無視して、囁いた。

「人の心なんて、誰にも読めないんですよ．．．」

ロジウムコーティング（後書き）

どんでんがえしっていうか一番重要な場面かも。将を射んとせばまず馬を射よ。

蘭姉ちゃんより東海さんが圧倒的に書きやすかったです。

ご読了くださったあなたさまに無数の感謝を捧げます。

フィッシュテール・セレナイト（前書き）

服部＋工藤。

フィッシュテール・セレナイト

ぴりりりりり、甲高い電子音が耳元で鳴り出し誰からの着信から確かめずに寝ぼけ眼で応答した。

「はあい・・・?」

「なんや、けつたいな声やなあ」

通話始まりの基本文句さえ言わない関西弁は電話を通すことで歪んでいたがかるうじて好敵手でもあり友人でもある服部だと分かる。そういえばこっちに上京してくるとか言っていたような気がする。

風邪引いてたら、覚えてるはずのこともとどんどん忘れていくのか。

額の上で冷えピタがぬるく貼り付いているのが気持ち悪くて、はがす。

熱を発する額に冬の冷えた空気が気持ちいい。

少し醒めた頭で、蘭と園子と遠山さんが昨日から旅行へ行き、三日ほど帰ってこないことをおぼろげながら思い出した。

「今工藤の家の前におるんやけど」

「マジで？ 入って来ていいのに・・・」

鍵は開いていたはずだし、走っているトラックにヘルメットをぶつけて急停車させるような奴が憤むなんてことはないだろうと思う。考えることを厭う今の脳みそは思考をどこかへ消え去る。服部の不機嫌そうな声が聞こえてくる。

「入る前に電話鳴らせえ言つたの、工藤やる」

「そーだっけ・・・まーいいや、入って来いよ」

「なんや、工藤・・・風邪でもひいとるんか？」

なぜ電話を切らないのか、とんとんと枕に沈んだ片耳に階段を上がる音が響く。

「九度三分。俺死ぬかも。服部に看取られるつても悪くないけ

ど虚しいな」

「そんだけ無駄口叩いたらあかんことはないな」

ぎし、と軋んだ音を立てドアが開けば、長らく会っていなかった色黒の顔が見えた。

ベッドから首をひねって見上げる。

見上げるのってなんか嫌だ。

立場もそっくりそのままになってしまいうつで。力を入れてふつと起き上がる。

それでもまだ相手の身長には足りなくて、抜け出すより先に服部が目線の高さまでしゃがみこんだのが先だった。

「おまえも変わりあるよーやな、いろいろと」

「・・・なんで分かんのか？」

「和葉がキーキー喚いってたで、蘭ちゃん放つって何してはんのや工藤君はとかなんとか、知らんねん」

今耳元でそうされているように顔を歪めている。

情に厚い遠山さんのことだ。おそらく園子の耳にも入っているだろう。

もしかしたら、そのために企画した旅行だったりするかもしれない。

「吐かせてこないと承知せえへん、で、どーなんや工藤」

話せば長くなる。そう伝えると、何も言わずに苦々しい顔をした。なんだかんだ言っただけで信頼している友人に、宮野と再会したことや自分との子供がいて小学生だったこと、蘭の願いを聞いてやれなかったことを、途中大げさなりアクションしてくれながらも頷いて聞いてくれた。

「そら工藤、おまえが悪い」

「分かってるっつーの」

麻痺するほど。

「まあ黒髪のねーちゃんとの間に子供おらへんってそれが不幸中の幸いやんな」

「幸いも何もねえよ、お前は遠山さん一筋だから他人事だろうけど俺は……」

一瞬遠くなる。

触覚があると思ったら、ふとんに倒れ込んでいた。

「工藤、寝とけ、話はよう分かったわ」

掛け布団を押し付けられる。

骨張った手が俺の首に手を回し、うーん熱いなとかんんとか言うて、ドアの向こうに去ってしまった。

時間の感覚がよくわからなく、10分だったかもしれないしもっとたっているかもしれないことも時計があらすでは知り得ない。

『ほら、薬飲んでちゃんと布団、くるまってなさい』

そんなふうに風邪引いて、看てもらったことがある。

まだコナンの体だったころ。

小さな体で、解毒剤絡みでもないと優しくしてくれなかった彼女。

冷たい指が心地よかった。

懐かしい。

感情が、心臓に穴を開けたように痛く染みる。

会いたい。

でもきつと、宮野は会いたいなんて思っていない。

なんか、宮野のことしか考えられない……

ぎいと、またさっきのリフレインかと思うと湯気の匂いがした。
鍋敷きを敷いてサイドテーブルに置かれる。

「精つくもんもつかへんぞ」

「え．．．いらない」

「どないもこないもあるかい、ほら」

口に差し出されたれんげ。

どこの世話焼きばあだよ。

そんな突っ込みもふたから溢れる美味そうな匂いに小さくなる。

素直に口に受け入れれば、焼けそうな熱さにたまごの優しい味で

泣きそうになった。

滲み出た涙は、大きな欠伸のせいにした。

フィッシュテール・セレナイト（後書き）

服部↓工藤↓志保さんのな。箸休めな一話です。

関西弁難しい・・・（^ー^；）　ここおかしいぞこんな喋り方しないぞってところがありましたら教えてくださると嬉しいです。

ご読了くださったあなたさまに無数の感謝を捧げますっ。

マニフェステーション（前書き）

志保さんと工藤氏の一人称。

マニフェステーション

「邪魔」

「まあまあの距離を保っているつもりです」

「すぐ屁理屈こねる人って嫌いだよ」

「私は好きですけどね」

「ねえ、そもそもついてこないでくれればお互い寒い中喋らなくても済むのだけだよ」

「どっかいところがそういうわけには行かない」

足早になっても負けじと歩調を合わせてくる。

鼻先が冷たい。冷たいと思えるだけ今年はまだ寒さは酷くないの

だろう。

鬱陶しい。

止まるとバネで弾かれたように隣も急停止する。

あまり見たくはない顔を見据え、精一杯鋭く睨み付けた。

「用があるんだったら言いなさい。言わなければ伝わらない」

答えるのを待ち侘びたように同僚は口角を上げる。

必死になって隠しても無駄だよ。

唇をなめらかに動かす。

読唇術など習得している自分が恨めしい。

「工藤新一のこと、相棒だっていったよね」

「・・・言っ たわ」

それがなんだという。

この人と接していても平坦な嫌悪しか感じない。嫌な予感などそのリズムに掻き消されてしまう。

「近いうち、やばくなるかもよ」

「やばく？」

鸚鵡返しになってしまう。

寒さとは違う戦慄が体を浸食する。

ゆっくりと、確実に。

「あなた・・・何を」

工藤君に、何をしたの。

声にならない恐れが体中から集結し、心を占めていく。

睨み付けたはずが、口が開いていた。

「別に、直接的に何かしたってわけじゃないさ、遠回しにちょちよつとね」

「何かしたのね」

「まあしたってことになるんじゃないの」

のらりくらりはぐらかす目の前の男に、黒く冷たいものが怒張し脳に直結する。

殺してやりたいと、こんなに素直に欲求が感じられるのは久しぶりだと思った。

淡いながらも愛しさと、身を切るような痛みだけ想ってこれたのは幸せだったのかもしれない。

「私に何かしたいなら私にしなさい。あのひとはwまったく関係ないわ」

「俺から見ればあるんですよ、残念ながらね。もしかさ、宮野さんの、奈々ちゃんだっけ。工藤新一の子供だったりする？」

「言っただでしょう、あのひとと私は恋愛感情でつながっている関係ではないって。わからない？」

とっさに返すことのできた私が奇跡だと思う。

あなどれない。

「わからないね。異性同士で恋愛関係にならないのが理解出来ない。だからこうやって聞いているんじゃない」

「いいかげんにして。もう私のまわりをつつきまわさないで」

もどかしい。

相手を最大に罵り貶め蹴ることのできる言葉が、この男には見つからない程に憎い。

もうこれ以上相手にしていたらこちらがどうにかなりそうだった。

背を向けて感情を収束させるよう深呼吸する。

「あのさあ」

なおも言い続ける。

五月蠅い。

煩い。

ウルサイ。

「工藤新一の奥さん、抱いちゃったただだよ。知りもしないのにそんな怒ること?」

はっと覚醒する。

時間が止まったように凍りついた。

そう思ったのは私だけなのだろうか。

歯をぐつと噛みしめる。

拳も爪が食い込むほどきつく握りしめていた。

駅がすぐそこにあるはずなのに、嫌に霞んで遠く見える。

逃げていくように全速力で走っていた。

会いたいと、会わなければいけないと、全身で感じていた。

おかしい。

最近蘭が。

時間がないからと探らないようにしていた疑問が、ふと浮かぶ。

考えれば分かってしまう気がして怖い。

それと真実を無様に追い求める姿が重なり、耳障りなズレの音。

昔から隠し事をすればすぐに分かる奴だが、余計に隠さなければ

ならないと必死になっている。

何をしている？

何を怯えてる？

今の俺にこんなこと言う資格はないか。

あ、考えてる。

『工藤。どっちがほんまに、大切なんか。決めなあかんで』

綴じる。

目で朗読していた小説の続きが読めなくなる。

早く続きを知り考えたく嘔み碎きたい欲求を抑えて。

『一番つてところが肝心やねんからな』

おかげで俺の熱がだいぶ引いたところで仕事があると言い忙しいな
く帰り支度をし始め、ふと思い出したように呟いた。

意味を考えている間に、玄関のドアが大きな音をたてて閉まるの
が聞こえた。

タイミングよく書庫から漁りだしてきた古風な恋愛小説には三角
関係だとか狭間で揺れる男の醜態だとか、そんな耳が痛いような物
語が、感情に感情を入れている度合いが過ぎた文体で綴られていた。
いつもは見ているのも恥ずかしくなるような感覚に襲われるが、
使い古された言葉達は案外核をついたものだと思う。

頭では理解している。

心でわかることができない。

対応できない順応性が、ひずみを起こす。

一番？

馬鹿言つな、天秤に掛けろつていつのか。

一番そばに居てほしい。

一番信頼できる。

一番相手が自分を必要としている。

一番お互いが当たり前。

稚拙な項目を脳内で作成してみる。

当てはめていくのが怖い。

逃げは誰のためにもならない。

守ると奈々にも自分にも誓った。

どう守れば、どうしたらいいのかわからないなんて言いたくないけれど。

とりあえず傍にいたい、それだけでどうになる。

何を壊してもいいというイカれた衝動に首根っこ掴まれて引きずり回されていると開き直ろう。

「ねえ、そこまで思って、おにいさんは気付かないんだ？」

マニフェステーション（後書き）

一番について。書きながらちょっと東海さんが憎くなってきてしまいましたw

ある作者様に、詩情が詰まった文だと言っていただけで嬉しいなあ
思いながら書いていたんですけれど、それは語彙が少ないってこと
にも繋がるんじゃないかってorz

もうちょっと年とらないと私、駄目かしら・・・。

お読みくださいますとありがとうございます。

ハウライト

「え？」

「だからね、なんでそこまで感じていておにいさんは自覚しないのかなと」

理解出来ないというふうに私を見る男。
キアラを作っているのかとも疑ってみたが、そんなことを私相手にする意味もない。

久し振りにコロラドの扉を押すと、仕事帰りそうなスーツを身にまとった例の男が待ち受けていた。

「俺は覚悟を決めた」とかなんとか熱病患者のような譫言を並べ立てる、とりあえず話を聞こうというふうに考えるのを計算として予

想していたのか無意識からなのか。

きつと天然でこうなのだろう。

くると今日の天気のように渦を巻くカフェオレの匂いに包まれる。

いつもどう創りだせるのか気になる。この甘く蟻地獄さながら取り込まれてしまうような感覚。

「私、おにいさんに二股の終結とやらを頼んだ覚えはないけど」

「二股って．．．んなこと言ってねえじゃん」

「同じ。それにあなたの奥さんと私のお母さん俺はどちらも違う次元で大切だからだとかそういうの、私に宣言する必要はない」

たかり来る害虫から阻止するのにいちばん適切だと判断したのがこのひとだっただけの話。

お母さんがこの男を愛していようとそれが逆でもまたしかりだったとしても、知った事じゃない。

そこを束縛する資格も術も自分は持っていない。

この男もどうかと思う。

話を聞くに、どうもお母さんに執着と愛着と共有した過去^{もの}があるようだ。

幼なじみだとかいう細君と比べてどちらが一番か、なんて悩んでひとりよがり^にに決着つけて脳内花畑探偵と化している。

くだらない。

奈々はつい嘲笑を浮かべた。

ずいぶんと無駄な顔になっているのに気付かなかった。

「おにいさんは、お母さんを守ることが世間一般で言われる不倫になるんじゃないかってビクビクしてて、全うに思えそうな曖昧な理由付けをした、それだけ。根本的な解決にはなっていない」

「裏返して言えばそういうことかもしれないけど」

「ふたりとも」

声帯が震わせる音の連なりにふいに紛れ込んできた捕食者。

そう名付けるにはいくらか可憐すぎた。

「恋慕だかなんだかの談義はいいけれど、熱が入り過ぎよ。お静かにお願いいたします」

マスターのやんわりとした注意。余計怖い。

冷や汗で頼んだ炒りたてカシューナッツをこちら側に引き寄せ、口に放り込む。

ついで、みたいな感じで本音を第三者に語る。

「恋愛感情って、そもそもなんなんだろうねえ」

次元だの両者ともにだの比べられないだの天秤だのこの男は言うけれど、根っこを掘り出してみればそこにたどりつく。カフェオレが入っていたかさのぶんフチを残し減っていく。

となりの男はなぜかタピオカが入った飲み物を啜っていた。冷たいだろうに。

「ま。早熟」

短くからかうような声に、顎でテーブルに突っ伏す。

「いや、話きいてたら、．．．そう思ってたさ」

ステンドグラスふうの色彩窓に灯りを見る。

名称なんてちよつと考えればすぐ意味をなくしてしまう。

信じるものがひとつでもあれば芽づる式になることもあるかもしれないけれど、その肝心なものを私は

持っていない。

この男は．．．どうなんだろう。

「恋と愛をいつしょくたにする日本語もどうかと思うわ。愛なんてそれこそいろんなものがあると私は思います」

「いつしよなふうに言われること多いけど、結構違つもんじゃないかな」

「まあね、こればかりは経験じゃないんですか。ちょうど今、経験していらっしゃるようですよ」

マスターの真つ青な瞳がいたずらっぽく笑う。

「誰が？」

「その名探偵さんですよ。今は・・・そうねえ、迷うほうの迷探偵かも」

「まったくもって同意」

ふたりでここそこくすくすやっている、散漫な動作で男の碧い眼球がこちらを捕らえる。

お母さんはきつと、深く飲み込まれそうなこの魔に魅入られてしまったんだろう。

わかる気がする。

特に深いわけでもないのに、瞳だけが無限の世界を含んでいるように感じる。

吸い込まれそうだと、奈々は思った。

「たぶん、蘭のこと、幼なじみじゃなかったら、こんなに迷ってなかった」

ゆるんだ暖かな店内に、その言葉が消える。

ふと空気が流れ込んだと思うと、ドアが簡素に開いたのに気付く。ちりと鈴も鳴る。

無意識にそこを見る。

びっくりした。

あんまりにここに来る意味がわからないひとだった。

キツイ香水の匂いを鼻孔に感じる。

ハウライト（後書き）

書けない書けない言うてたのに書きました。

奈々ちゃんと工藤氏の絡みを書くのは楽しいです。そういえばあんまり新志じゃないっていうかふたり接触してないよねっていう。

ご読了ありがとうございます。

スノークォーツ

通り過ぎる人間の服の裾に白い粒がついていた。

雪が降っていた。

ダッフルコートのフードを頭にかぶせて、手をポケットに突っ込んで足早に歩き出す。

『あ、』

驚掴みにされる。その手に腕にそして感情を露出した心臓に怯む。

何を恐れているの？

わからない。

事実や状態理論ではなく、動物の本能として恐怖を感じている。

家に帰るのが億劫だ。

誰かがドアの前で立ち往生して、手すりの壊れかけの壁なんかを弄っていたりして。

階段を上りきった私を見つけると、寒さに緊迫した頬を緩める。

そんな場面がいつ来るか察知できない。

私はまたなにかを知らなくてはいけない。

『そいつ、奈々ちゃんのお父さんだよ』

戯れ言をいつているのかと思った。

嘘は得意な筈だ。あのお母さんを多少なりとも自己の波に巻き込むことができるということはそれなりに能力がある輩だということ。

もうひとりの男を見た。

私と一瞬視線が絡まり、はっとして唇を噛んで目を反らしてた。

なにも言わないの。

尻込みばかりで頭で理解しないと動けなくてそのくせ要領が良くていいとこだけもってくひと。

近寄るだけで苦しめる疫病神に、願わずとも知ることさえ気づかない。そして傷つける、引きつける、気をつける。

雪が激しくなってくる。

埃が舞うように迫ってくる。

風が体にまとわりつく。振り向きたくても着締めた冬服が自由をあまり許さない。

早く住処へ帰りたい。

いつのまにか私は立ち止まっていた。

泣いたりしないのに。

嫌なことじゃない。欲したことでもない。

姿の見えない圧迫感。

柔らかい布で首を絞められているような、もがけないもどかしさ。

ふいに固まっていた歩みが解け、足が勝手に歩き出した。

家に帰らなければご飯にもありつけない、読みかけの本の続きだ
って知ることができない、お母さんにも会えない。

あのひとが私の父だろうと、何も変わることなどないはずだ。

少し自分の心に軋みができ、あのひととはきつと今までのように
美味しいコーヒーを隣で交わせなくなるだけ。

それだけのこと。

『マンネリな人生が嫌いとかいって、あんた結局変化が怖いんじゃないの』

虎落笛もささやきに聞こえるなんて、私も結構ダメになってるの
かもしれない。

「おい、待てよ！」

悲鳴に近く呼びかけて、振り向いた仕草が彼女にどこまでも似ていた。

雪が邪魔してうまく男をフレイムイン出来ない。今逃げられても追うことは困難だろう。

「なんだよ」

「さっきいったこと・・・本気か」

そう問いかけるとケラケラと笑われ、余裕切ったふうに見つめられる。

直視できずにいた俺はその強い視線に引つ張られ目を合わせた。

さっきの面影を微塵も残さない真面目な表情だった。

「本気もなにも、既成事実」

蘭を抱いた、と言われた。

奈々の父親が俺だと、言われた。

横にいた奈々を見た。

目を少しだけ見開いて男を凝視していた。

それからそつと確かめるように俺の方を見る。奈々の瞳は宮野でもなく誰かに似ていた。それが何故か辛くて目を反らした。

蘭のことよりも奈々のほうが気になる自分がいる。

蘭は昔から知っている。わからないことのほうが少ないし、年月の広さでちよつとのズレは覆い包める。

奈々は違う。会ったのだって話したのだって存在を知ったのだってお互いつい最近だ。

どんなことを思つかも行動をおこすかも予想できない。

『自分の知っていることでしか、相手を見ようとしななんだね』

奈々の声が聞こえた。いつか、ふと言われた言葉だった気がする。

探偵やってるところなるんだよ。

ふうん。じゃ、お母さんにもこうして・・・理屈っぽくネタバレしてたんだ。

え、あれ、読んでなかったの？

読んでるの。まだ崩壊家族の途中くらいまでしか読んでない。

あ、そうなんだ。悪いことしたなあ、ごめん。

おにいさんの説明じゃ内容がいまいちよくわかんなかったからネタバレってほどじゃないな。

んだよ、可愛くねえ。

・・・お母さんのこと？

・・・誰が宮野の話した。

なんか・・・いつもお母さんにそういつてたんじゃないかって、ふっと思っただけ。

あいつに似てカンが鋭い奴。

知識に経験が追いついていない。

愛しいと思う。

手を伸ばせば近くにいるのに触れるきっかけがない、そんな自分と宮野の子供。

「工藤君」

佇む彼女が雪風の中にいた。

スノークーツ（後書き）

やっと会えたっちゅーわけか．．．これは服部氏だった気がする。京都が舞台っていうのは心臓の奥をくすぐられるようないわけるツボなんです、なんだか見る気がしない迷宮の十字路。工藤氏がいるとしても見えないところで灰原さんと博士がどんなことを思いながら後始末をやっているのか気になりいたたまれなくなり工藤氏に恨みが積もるのであまり見れないですね。

ちなみに文中で奈々ちゃんと工藤氏が語り合ってた本は難波 利三さんの女子高生誘拐ゲーム。

ご読了ありがとうございました。次話もお楽しみに。

パイライト

「．．．宮野か」

「ほかに誰がいるの」

「．．ごめん」

「あなたにいつても、たぶんどうしようもないことだけど」

尺取り虫みたく相手の予想する返答をよけて言葉を発する。
宮野としかできない会話だと思っている。

「私に近寄らないで」

「蘭に悪いからってか？」

「それもある」

「約束した。守るって」

「．．．まだ覚えてたんだ」

彼女がふつと自嘲気味に笑った。
踏み出す。

「期限、ないからさ」

「形のないものはいつ消えるかわからないけれど、形のあるものと違って姿をなくすとは限らない。そういうこと？」

「そんな感じ。わかってるじゃん」

それだけではこの寒さの中しのげるとは思えないけれど、巻いていたマフラーを彼女の首にかけた。相変わらず眉一つ動かさず拒みはしなかった。

深く澄み通る声がぼつりと言った。

「これ以上私に深入りすると、本当に何もかも壊れることになる」

「何もかもって？」

「探偵としての地位や、蘭さん」

「俺がそんなものしか持っていない男に見えるか？」

「多くを所有しているからといって人間的に豊かだとは一概に言えない」

「俺にとつては・・・そんなものでしかねえよ」

「あなたがそんなものなんて言いぐさができないことって何かあるの？」

言葉に詰まった。

川のようにとうとう続いていた声が途切れたのに罪の意識を感じた。

ごくりと唾を飲み込む。

涼しい顔でその様子を眺めていた彼女は何でもなさそうに目を逸らした。

「とにかくそれだけ」

「待てよ」

とつさに腕をつかむ。

バネのように彼女の体が弾んだ。

「理由も説明されないで、はいそうですかなんて引く男に見えるか」

「あなたがどんな男だろうと関係ないわ」

「説明しろ」

ふと出た声が低く重かった。

目の前のくつと上がった肩が下がるのは、軽いため息と同時だった。

「あのひとが、蘭さんを抱いたって言ってたわ」

「知ってる」

「え？」

決意を込めたような告白にあっさりした答え、拍子抜けしたように振り返る。

「知ってるよ。俺が父親だってことも．．．奈々にバレた」

「なんで．．．」

あいつが言いふらした、と付け加える。

祈るように目を閉じた彼女のまぶたに雪がおちる。溶けずに結晶が残るまま。

指先が凍るより自分のものなのかも認識できなくなってきた。

「どうすればいいのか、わかんねんだ」

俺が依頼の扉を開けなかったら。
奈々と会わなかったら。

いろいろと思うけれど、戻れないことなんて染みている。
今こじれをどうにかするにはどうしたらいい？

彼女に尋ねても苦しめるだけだ。

それでも己の背負う面倒ごとを分かち合いたいと思う自分に呆れる。

これ以上何かを咀嚼させてどうするよ、馬鹿。

面倒だ。

ぜんぶ面倒だ。

なんで一夜でも関係を持ってしまったんだろう。
なんで蘭と結婚なんてしてしまったんだろう。

自堕落な考えが過ぎる。

「蘭さんをとるか探偵をとるか」

背中越しにちらりと瞳が覗いた。

それが彼女の声だと気づくまで三秒かった。

「私も選ぶわ」

「はあ・・・んう」

よだれを零し緩みきっている女の唇に舌をねじ込んでやると、がくりとその膝が力を失い崩れ落ちた。体に手を回すと、朦朧とした手つきではらわれる。

最後までではかろうじてしない、ってか。

東海は喉の奥でひくついてくる笑いを飲み込んだ。

最早通い慣れたホテルの中だった。

女の家からは離れたところにありはするが、見つかつてても不思議ではない。工藤新一の顔が知られているなら、妻もまたしかり。

そこから崩れるものなど千差万別。崩壊こそが目的だった。

ふと志保の揺れた瞳が眼裏に霞んだ。つなぎ止めておこうと思っても、そこに思いが行かない。舌打ちをしそうになる。

何よりも手に入れたい。

自分の懷で暖めてその時間は永遠になればいい。

子猫に抱くような庇護欲がかき立てられる。

そんなことを彼女は望んではいないだろうが、思っただけなら勝手だ。

衣服を脱ぎ捨て、愛撫を望み、それでも最後までやらせない。都合のつくところしか受け入れない。

愛されて育った人間は皆そういう．．．選ぶものなんだろうか。東海の目が蘭に移る。何も思わなかった。

墜ちるなら墜ちればいい。墜ちないなら否めばいい。

正直言って飽きてきた。

それでもここまで関わってしまったら後戻りは出来なかった。

しばらくは立ち上がれなさそうな蘭に見かね、東海はコートを羽織って外に出た。

冷たい風に、雪は無かった。

パイライト（後書き）

話の流れが自分の中でかなり変わってきています。終わるのか、これ。

花粉症や気温の気まぐれにお気をつけください。ちなみに東野は筋肉痛で体育座りが出来ない状況です（´・ω・｀）

ペンデュラム（前書き）

奈々ちゃん
と和葉ちゃん
視点です。

ペンデュラム

「ただいま」

鍵を解錠する音が聞こえた。

玄関のほうを見やると、お母さんが明らかに疲労を滲ませた顔でのれんをすり抜けてきた。

残業をこなしてきたであろう時間だった。
外はとつぷりと夜に沈んでいる。

「おかえり」

「ただいま。遅くなってごめんなさい、ご飯作るわね」

「いいよ、お風呂入って寝てて。私用意するから」

「じゃあお願いね。ありがとう」

お母さんは好きだ。

子供相手にも礼儀を踏まえて接する。対等に向かい合う。そんなところも好きだ。

嫌いなところのほうか、むしろ見つからない。

ずっと大好きなお母さんと、一緒に暮らしていくのだと思ってる。

どんなことがあっても、それだけは変わるはずがないと思ってる。

父が居ようが居まいが、私の母が側にいることに変わりはない。自分なりにお母さんを変わず大切にする。もともと私が持っているものなんてたかが知れている。今更失くすことを恐れてもどうしようもない。

展開の起承転結もなしに、そう奈々は結論付けた。

それでも何かを知りたい衝動が、心の奥底に静寂息づいている。

「今日はね、ポークカレー作ってみるんだ」

「あら、知ってるの？作り方」

「普通のカレーの肉がポークになっただけでしょ、難しくないって」

着替えるお母さんが後ろから覗き込む。

ふわり、嗅ぎ慣れた香りが匂う。

泣きそふになる。

「ねえ」

「なに？」

平坦で抑揚のない声なのに安らぐ。聞き慣れた声。でも、飽和しない。

「お母さん、奈々がいてくれて本当に良かったって思ってる」

「．．．なに、いきなり」

「あるとき生んで本当に良かったって」

「．．．うん」

「それだけよ」

内容に相応しくなく羽のように軽い口調で言い連ねたお母さんは、そのまま脱衣所のドアをそっと閉めた。

眼球が焼け爛れそうなほど熱いのは、剥いた玉葱のせいだと思いたい。

白い膜が張ったように目の前がよく見えなくなる。零れる。

頬の上をだらだらと流れていく涙は拭っても拭っても止まらない。

あまり派手に泣くと、お母さんに感づかれる。焦りが余計に嗚咽へ変わる。

『なあに、奈々、泣いたの？』

『な、泣いてないよ』

『すぐ分かるの。奈々、泣いたなって。何年奈々のお母さんやってると思ってるの』

前髪を掻き上げられて翠玉のような瞳と視線が絡まると、やっととどまった涙がまた勝手に溢れてしまうことが目に見える。

それでもいいかな。

奈々はどこかで思った。

肩を抱き寄せてもらいたい。
少しだけ、叱ってもらいたい。

お母さん、ごめんね。

三日ほどの泊まりがけでの箱根旅行。

引き摺るように連れていった観光地ではあったが、蘭にとっても久しぶりであろう女友達だけの旅行は楽しめていたように、和葉には見えた。

園子も和葉も慰安旅行として計画していたものであったため、蘭の背景については何も問いたださなかった。

笑う瞳の影もだいぶ姿を見せることが少なくなったように思えたけれど、拭い去れたとは思っていない。

——工藤君は、何してんのやろか。蘭ちゃんがこんなな
つてのに、アホちゃうか。

罵倒しきれない怒りは積もるが、和葉が心の中でくさくさしてい
ても仕方が無い。

帰った後もふとしたときに蘭の様子が気になって、さつきも平次
の足の甲にたこ焼きプレートを落とし自室退避中なのである。

電話、してみよ。

思い立ったが吉日、携帯でメモリを呼び出して繋げる。

コール音が妙に緊張を高まらせる。

『もしもし』

「蘭ちゃん？」

どきどきしながら携帯を握りしめた。

『和葉ちゃん、どうしたの?』

「あ、いやね、蘭ちゃん今、どないしてるかなあ思て」

『どうもしてないよ』

「. . .」

しばし考えた。

表面的なことではなくただ和葉の胸に黒いものが過ぎる。

もしかして蘭は、もう後戻りが出来ないような大変な事に足を突っ込んでいるのではないか. . .

「蘭ちゃん」

『なあに?』

「アタシに出来ることなんか、あらへんと同じようなもんやと思っけどね」

『うん』

「一人で抱え込むよりは、二人で悩むほうがええんとちゃうかなって思うねん」

『．．．』

「せやからもつと頼って欲しいなあって、思て」

『．．．ありがとね、和葉ちゃん』

いつもの優しい声だ。

何故そう我慢するのだろう。無難な所しか見せようとしないのだろう。

大切な親友だと思っているけれど、蘭のそんな面だけは理解出来なかった。

そうして無理に笑いながら堪えている姿を見ると、苦しくなってくる。

「．．．もつと、我が俤になってもええんよ、蘭ちゃん」

『そうだね．．．ありがと』

「ほな」

自分に言えることはこれだけしかない。

遠くから見守ることしか出来ない己が悔しくて仕方なかった。

『和葉ちゃん』

「なに？」

数秒かの間を置いて、蘭はとんでもないことを言い出した。

『浮気しちゃっても・・・いいかな』

「浮気い?!」

つい大きな声が出てしまう。

背を向けたドアから平次の訝しそうな顔がひよいと覗く。

「浮気がなんやねん、和葉」

「ちゃうわアホ！ 浮気やない、うわき．．．せやせや、疼きや。平次にその．．．イタされた痕が、疼くなあゆうて」

「はあーん．．．ええねんで、またしてやつても」

「アホなことゆうてへんでさっさとお風呂にお湯張っというて！ アタシちよつと出てくるわ」

分からないままで、上京する手筈を整え外に飛び出した。

ペンデュラム（後書き）

こっそり泣いた筈なのに何故かばれるのがしょっちゅうでした（´・ω・´）

どーしてだろうね。目もそんな腫れてないはずなのにね。

ちよっと平和要素もありましたが（個人的趣味）苦手なお方は申し訳ありません。

次話もお楽しみに♪

イリデッセンス(前書き)

和葉ちゃん＋蘭姉ちゃん

イリデッセンス

「蘭ちゃん！」

少し霞んだ橋の上に、佇んでいる親友の姿を見つけ全速力で走り寄る。

つい勢いよく体当たりしてしまい互いの肩に手を置く。懐かしさが苦み走る。

「和葉ちゃん、何も東京まで来てくれなくてもよかったのに。大変でしょ?」

「電話なんかじゃあかんよ、こういうことは」

「・・・そつか。そだね。ありがとう」

蘭は申し訳程度の笑みを浮かべた。覇氣がない。

そこにどこか覚悟の色が見え、和葉は目を伏せた。真っ直ぐ見つめられない自分が情けなかった。

覚悟は、抗うことをやめて諦めることとさして違いがない。

蘭が何かと戦っているのならば、降参なんかしないで欲しい。絶対に。

そう伝えることもうまく声には出来ない。

工藤邸の雰囲気の良いはいつ来ても視ても、なかなか好みだ。埃をかぶった部屋が無数に混在し、吹き抜けの書庫にはそこの

図書館よりも膨大な本がある。

大きな構えの服部家でも古き良き時代を感じるけれど、この屋敷の乾いた空気も悪くないと和葉は思う。

でも今日は薄汚い雲がかつた空が暗いせいかな家主が不在なせいなのか、あまりこの家の匂いが良くない。蘭の横顔が曇っている。

出されたほうじ茶から湯気が抜けていくのを眺めながら、恐る恐る蘭の話に耳を傾けた。

あまり淡々と話すから、和葉の方が蘭を二度視して狼狽えてしまふような態度でつらつらと。

ふいに言葉の流れが止まる。

一通りはしゃべり終えた、という顔でティーカップを口に付ける蘭を余所に和葉は信じられないように彼女を見つめた。それと同時に、今まで蘭と過ごして知ったことが全て崩れ去るような喪失感も、ふっと浮かんで消えた。

新一とすれ違いが続いていることなんて昔からだったのに、今ではそれが耐えられないこと。

ある男の人と体の関係を未遂だけれど持っていること。

この生活は互いのためにも良くないのではないかと考えていること。

「まあね。私が逃げてるだけだってことは、分かってるんだけど」

「・・・園子ちゃんには、言ったん？」

「ううん。園子、ちょっと私が喋ったらすぐに新一のところに飛んでって半殺しにでもしちゃいそうだもん」

「そやね。アタシでもそうするわ」

真剣に本気で言うと、蘭はからからと笑った。

瞳だけ笑っても泣いてもいなかった。

子供のように鼻の奥がツンとする。

蘭のための涙ではない。

自分を慰めるための涙だ。

蘭の声が聞こえた。さっきの笑い声を微かに含んだ声だった。

でもね。

「新一と対等だった気がするんだ、ちょっと前まではね。でも今は、私だけ新一の作った脆い囲いの中にいるみたいなの。それが、どうしてもヤで。」

ふつと黒くて大きな眸がぼやけ虚ろになる。

涙が零れるときの目だ、と和葉はどこかで思った。

もつと私に話してよ。

そう胸の内に流し込まれたような気がした。

名前を呼ぼうとする。遮られ、切られたように口を閉ざす。

そつと様子を眺めた。泣いていない。

ただ、口を付けたカップを置く手が震えてカチャカチャと音を立てているのがいたたまれない。

どうすればいい。

蘭のためにしてあげられること。見守ることだけなんかじゃないはず。

『本人らで解決できるコトに、首突っ込むと余計にこじらせる。わかつとるか？和葉』

声を追い払うため頭を振った。
旅行から帰宅してきたときに、ぼつり囁かれた言葉。いつもと変わらない声音なのに耳に焼き付いて離れない。

——そんなんわかつとるわ。

でもな、これだつて蘭ちゃんとアタシの問題なんやねん。平次がこの口出しせんというて。

「・・・蘭ちゃん」

「ん？」

「なんも我慢することなんてないんよ、なんも悪くない」

「和葉ちゃん」

息せき切って加速していく言葉を紡いでいた意識が、蘭の方へ向かされた。

さっきの脆い瞳の光などどこにもなかった。

締まった眼差しが和葉を射貫く。言葉に詰まる。

「東海さんが好きなの。誰からだって奪いたいくらい好きよ。私、覚悟してる」

和葉はふと大きく息を吐いた。耳を疑ったりはしなかった。真実を聞いた。

依存とも執着ともとれる心を幼なじみに向けていたのは、お互い様。

当たり前に傍にいたし自分が選ばれないなんてゆめゆめ思ったことはなかった無意識の傲慢さ。

蘭がずっと新一のことを見ていたのを知っている。禁欲的とも言えるほど一途に焦がれていたのを。

手のひらひっくり返したように、なんて変わり様を驚くほど経験値が低いわけではないけれど。

それでも、そないにカンタンに変わるもんなの？

和葉の戸惑った心内を読み取ったように、蘭は微笑みで受け止める。

懐古の味が舌に染みていく。ああ、出会ったときもこの笑顔を見た。

「ここで我慢していたら、一生後悔すると思うの。新一のことは今でも好きだし大切だよ。でも一番じゃない」

「一番やない・・・か」

一番。

一番なんて。

「．．．本気なんやね」

「うん」

短く肯くだけで伝わる。多くは知らないけれど、これでいいと思える。

「氣いつけなね。蘭ちゃん」

「分かってる」

「うん」

瞳の応酬をする。

笑った。笑いたいから笑ったのではなくて、他に映す表情が見当たらなかったから。でも妙にすっきりしたような顔を、蘭はしていた。

やはり蘭は蘭だ。何かを真っ直ぐに握りしめ羞恥も無く見つめることが出来る強さは、紛れもなく。

絶対に、これは降参なんかやない。

よかった。

和葉は目を細めた。

その笑顔は選んだものだ。

「ただいまあ」

大阪に和葉が帰ってきたときはもう夜の十時を回るころだった。
蘭や園子と東京をあっちこっち飛び回っていたから足もむくんで
パンパンだとかなんだとかぼやきながら、背中にぎゅっと抱き着い
てきた。

「おまえ、今何時やと思てん」

「なあに、アタシが心配やつたん？」

「心配やな。平気で飴ちゃん目の前にぶらさげられてたらついてくようなおまえには」

「そんなアホやないわ、アホ」

肩に頬をすりつけてくる。

「なんや自分気色悪いなあ、と言いながらも平次は緩む頬を締めない。いつも強情っぱりで美少女アニメも顔負けのツンデレっぷりが凄まじい和葉がシラフの時自分から接触してくるのも矢が降るほど珍しくはないとはいえ珍しい。」

「なあ」

「ん」

「．．うまく、いくとええね」

「ああ」

聞かずとも肯いた。

今この肌で触れているのに、恋しい。

イリデッセンス（後書き）

敢えて工藤氏とちょっと距離がある和葉さんにこの場面はお願いいたしました。それと和葉さんと服部の絡みを書いてみたかったw
わかったのは女の子の大阪弁はオイシイってことですね、はい。それにしても私の書く大阪弁は怪しすぎる。服部にとことんぞつこな和葉さんがなんだかんだ好きです。

次回もお楽しみに（^ω^）

ギベオン

尻ポケットに突っ込んだ携帯がぶぶぶぶ、と震えた。サブディスプレイには登録されていない番号が白み走っている。応答ボタンを押して耳に当てた。

『今話せるかしら』

取り澄ましたようなメゾソプラノの声。機械越しても忘れたりしない。

「拾った女脱がしてるときだって宮野さんの連絡とあらば飛んできますよ。ていうか番号どこで知った？まあ宮野さんなら怪しいルートでも伝って」

『シエリー』

「え？」

『夜にそこへ来て』

ぶつりととりつくしまもなく通話は終了した。
薄っぺらい黒のボディの携帯電話を撫でみる。彼女からの着歴があるというだけで、この電子機器はたぶん一生手元にある運命を辿るのだろう。機種替えだってできれば今このときから、したくはなくなったけれど。

助手席に財布と携帯を放り出し車のエンジンをかける。ベントとかフェラーリとかあんまり好みでもないが、かといって無駄に空間が広い国産車も乗り心地が悪い。

東海はフォルクスワーゲンのゴルフカントリーを愛車にしていた。

ふと志保の茶髪が眼前にちらついた気がした。あっという間にフロントガラスが真っ白になる。雪だった。

—— 最近よく降るな。

雪は嫌いじゃない。この手の内に入れたと思うと姿を変え心許なく消える、でも確かに感触があった。そんなふうが誰かに似ているから。

シェリーというと、研究員たちがよく立ち寄る落ち着いた雰囲気
のバーだ。繁華街の途切れ目の理容院地下に構えている。

カクテルがなかなかの味だったことを覚えている。
車を外れの路肩に止め、バーの狭く薄暗い階段を下りドアを押し
開けるとちりんと鈴が控えめに揺れた。

カウンターの端に彼女は座っていた。

「もう少し一人で飲ませてくれてもいいんじゃないの」

「俺もそのつもりだったんだけど、こんなに早く宮野さんがいら
っしゃると思わなかったの」

「そう」

「へえー……シルバーレット銀の弾丸か」

ほぼ無色透明のグラスの中身をちらりと見た。志保の目はどこか捕らえられないところを見ていた。

「好きなの？酒」

「別に。ただ．．昔やむを得ず詳しくなってしまうような環境にいたから」

「ふうん、知りたいなあ。宮野さんのこと、もっと」

意味ありげに顔を寄せてみる。反応はない。少しばかり悲しくなった。

前に感じたい予感つてのは、ハズレだったのかね。
一度逃すとチャンスの巡りは悪くなる。小さく舌打ちした。

「なら、私の話に耳を貸していただけるかしら」

「なんなりと」

「あなたは何をしたいの？」

今日初めて彼女の瞳が東海に向く。

「何をつて？」

「あの子に手を出して、何かいいことがあるのかしら」

目尻がすつと細まる。あの子とは蘭のことだろう。取り払えない憂いが見えた。

自分の好きな男の妻に、何をそんなに思うことがあるのか。

「身体はまあまあいいし悪くはな、」

「工藤君とあの子になにがあつたか分かりもしないあなたが触れていい資格はないわ」

その声に触れた耳が熱くなる。冷たさが目の前を過ぎる。

彼女にしたら珍しく感情が表に出た言葉なのに、何も感じない。相手の事情が見えない。高ぶりを隠そつと押さえている気配だったり恐れていたたりそんなもの。

底知れないものはわからない、けどどうしたって彼女を知りたい。なるべくそつの無いようにほほえみかけた。

「分かつてるなら、いいんですよ。なら、よく理解してそうなの宮野さんが教えてくれたって」

「あなたの想像力では考えもつかないことだろうから、無駄ね」

「勤務中は信頼されてるのになあ」

「仕事以外のあなたは私にとっては要らないって前にも言った気がするんだけど」

「手厳しいなあ。いいよ、もうあの子には手を出さない。そろそろ飽きたころあいだし」

「ずいぶんふざけたことを言うのね」

「ほんとだつて。それに、このままあの夫婦に亀裂走らせてると宮野さんと工藤新一が接近しちゃいそうで」

「接近？」

ふふん、と嘲笑される。本当にバカにされているのが分かる。無知は最も恥ずべきことだと知っていても彼女の視線は、東海にとつては甘いものでしかない。

もっと、俺のこと見てよ。

なんでもいい、それがたとえ息を絶ち濁った生ひかり気のない瞳でも。

「だからまだおこちゃまだって言ってるのよ」

計測器がまだ使いこなせていない、と志保は言っはかりつ。

「いやだつて、実際工藤新一がちらちらフレームインするようになったでしょ？」

「あなたとあなたのお父様のおかげでね」

「いえいえ礼を言われることでは」

「・・・あなたといえることがこんなに疲れるものだと夢にも思わなかったわ」

長いため息をつき、首を回すように傾げた。端麗な人だけど、母親の風格がそこで初めて垣間見えた。

それに見ほれていると、ねえ、と柔らかく呼びかけられる。

あのひとと私はね、

彼女はこれ以上ないほど、幸せそうに薄く微笑んだ。

解けた魔法の残骸でしかないのよ。

さっきの話の続きだということに気付くのに三秒かった。

「．．．蘭」

「ごめんなさい」

その姿を見つめた。向かい合わせに食卓へ腰掛け、間に置かれる薄っぺらな紙。白い。

「今まで、ずっとわかんないままだったんだけど．．．こうしたほ

うが いいんだと思うんだ。だから」

「なんでだよ」

少し熱を持って辺りを見回している感情と言葉、入れ違うように頭では不思議なほど予感の合致が持て囃されていた。

いつかこうなることが分かった？

先に自分が似たようなことしそうなこと感じてた。

でもまさか、蘭が。

「欲しい人がいるの」

苦しそうに、でも大切そうに蘭はそういった。言葉を覚えたばかりの子供のようにせきたてる。

「煙たがられてるのわかってるんだけど・・・好きなんだ、すごく欲しいの、あのひとのこと、すごく。こんなのほんとに初めてで」

「・・・うん」

頷きが肯定に変わる。

「でもこれ以上を手に入れるには、新一ときっぱり折り合いつけないから。だから、別れてほしい」

蘭の瞳はどんなときでも真っ直ぐだ。

必要以上に濁ることも必要以上に煌めくこともなく、ただただ真っ直ぐ。

その硬質さに貫かれそうな気がして、俺はいつも目を逸らす。

逸らし続けたオチが、これなのかもしれないな。

嘲笑した。

自分に向けられたものだと思ったのか、蘭は「バカにしないでよ」と口を尖らせる。

違うよと笑うと、それから俺の答えを待つようにゆっくりまぶたを舞台の幕さながらに下ろしていった。

昔からずっと一緒にいて、少しの間離れて、また同じ空気を肺にため込んでる。

目に見える直接的な関係にはいつか飽きがくるもんだと、いろんな世の中を通して知ったこと。^{事件}

気の抜けた笑いが零れそうほど安心してゐるのに気がついた。

相手が望んだことを己も笑って受け入れられる。理想の極み。

それに従つてこのまま名前を書いて判を押す、それでも書いた「工藤新一」という文字が熱病にかかったようにのたくっていた。身体は緊張しているのかもしれない。

「ありがとう」

蘭が笑う。

少しの沈黙。あまりおいしくはない。気まずい。

今まで俺たちは近すぎた。近いからいいってもんじゃない、蘭は暗にそう言ってるんじゃないか。

勝手な思い込みすぎるけれど・・・そうだとしか思えない。

「あ、あと新一」

「ん？」

「宮野さんに我慢なんかさせたら許さないから」

「ぶっ」

吹き出すものもないのに嘔き出す。

「新一は昔っから優柔不断なんだからさ、何人の子が泣かされてきたと思ってるの？」

「そんなつもりは」

「つもり、がないから悪質なんだよ」

「．．．だいたい、なんで宮野のこと」

「久しぶりに博士と電話で話して聞いたのー。それに最近の態度」

「素振りなんか見せたつもりなかったんだけどな」

「わかるよ」

柔らかく微笑んで、あーあとやけになったような声を落とした。

「それでもう他人なんだねー、うん、なんか感慨深いね」

「もともと他人だったけどな」

「そうだけど、でもほんとにいつも一緒にいたからなあ。家族みたいだったね」

「これからもだろ?」

疑問型で問いかける。

一瞬きよとしたあとに瞳をいじけたように逸らした。

「・・・これからは、親友で」

その言葉で、生きてきた二十数年がまるで嘘のように背後で消え去っていくのを、暖かく感じた。

ギベオン（後書き）

蘭姉ちゃんと工藤氏の強かった関係が褪せていくような感じは難しいですね。薄まるんでも消えるんでもなく、褪せる・うむ。志保さんと東海さんの一方的な感じも個人的には気に入ってます。でもねっやっぱり新志があたい好きなんだっ。

次回もお楽しみに（＾ω＾）

タンブル

じゃあ、と手を振って蘭は出て行った。大方の荷物はおっちゃんに送っていたから、洒落た春物のワンピースと小さいポシェットを身につけただけで。

いろんな思いが駆け巡るかとも思ったけれど、あまりそうでもないことに驚いた。

見送りに出ていた玄関を離れ、久しぶりに固定電話の番号ボタンを触って受話器を外してコール音を耳に慣らすと、まもなく聞きたかった声が応答する。

会いたかった気持ちも思い詰め続ければ飽和状態になり、さっぱりと緊密的な心地よいものになってくる。

『はい、宮野です』

彼女の居場所がわかったときのように壊れてしまいそうなほどの衝動は感じられないけど、どう言い表せるのだろうか。暖かいでもなく一時の満たされた心。

俺がこんなこと思っても、おまえは鬱陶しいと眉をしかめるだけだろう？

子供の姿に戻りたいとは思わないが、あのころのふたりの距離が今では美しいと感じる。

「俺だけど」

『うちを騙してもたいしたお金にはならないと思うんだけど』

「違うって。俺だよ、新一」

思いあぐねるような沈黙。

『職務権利乱用もたいがいにしたほうがいいんじゃない』

「いまさら」

笑いは水一滴もない乾いた砂漠のようだった。

それを口に出すことのほうが無粋なんじゃないのか、宮野。

『生き延びることと蘭さんのためにならなんでもやってのけたわ

ね。今も・・・かしら?」

「少し違うけど」

『あらそう。用件は? 無駄話をしたかったとかくだらないことじゃないでしょうね』

「んーまあ、声がききたかったってのもあるけど、おまえには知らせておいた方がいいかと思ってさ」

『なにを』

「蘭と別れた」

『え?』

「離婚届け出して、出てった。たったいま」

は、と息をぱつとりと飲み込む音が聞こえる。携帯よりも音がクリアな固定電話。

巧く言葉にできないというふうに言葉を詰まらせる彼女がやっと発した一声は、ひどく震えていた。

『どうして』

「蘭が別れたいって。たぶん・・・おまえんとこの社長の息子だな」

反応に興味があった。無邪気な好奇心は即物的だとは気付いていたけど。

返ってきたのは意外すぎるほど意外なものだった。

『それがどうしたのよ』

「へ」

思わず間の抜けた声を漏らしてしまう。息継ぎ待たずに受話器から宮野の冷めた声が流れてくる。

『幼児化していた頃ならまだしも私に報告する意味が何かあるのかしら。そんなことを言うために電話してきたの？』

「あのなあ」

こんなところまで可愛くない彼女に呆れる。向こうで彼女も呆れていると確信する。そんな感じがする。

がさごそと雑音が聞こえる。受話器をもつ手でも変えたのだろうか、肩と耳で挟んだとか。

『忙しいのよ、今日は久しぶりにあの子よりも早く帰ってこれたから・・久々に手間のかけたもの作ってあげられるわ』

「・・そうか」

保たせようのない母性と彼女を感じて、胸が苦しくなる。

『もう切っていい?』

「ダメ」

『勘弁してよ』

声を上げて笑った。

何故こんなに俺は浮かれているのか少し不思議に思いながらも彼女の心底困ったような口調が珍しく。

見当違いだったことに気付いた。

『・・・やめて、くだらない冗談』

笑い声に差し入る小さな微かな声。濡れている。

張られた琴線を弾くような嗚咽がそばにある錯覚に陥る。

『わけのわからないこというの、やめて』

細い細い言葉に、俯いた。

耳にへばり付いている電話が一瞬で嫌になる。

「なんで泣くんだよ」

『泣いてないわ』

「嘘つけ」

『嘘じゃない』

「．．．．．なんでおまえが」

何故泣いているんだろう。今話したことにそんな要素が彼女にとつてあったかといえば、首を横に振るしかない。

『ねえ』

「ん？」

『あのころは、あなたをあの子の元に帰すためだけに生きてたよ
うなものだったの』

「みや、」

『そのときの結末が、こうだっていうの?』

おまえのせいじゃない。関係のないことだったんだ。
そう言ってもたぶん納得なんかないだろう。

「・・・五分でそっち行く」

受話器に唾を飛ばしながら吐き捨て、制止の言葉もぶつつりと途切れて電話は落ちた。

この女は本当にどう罵倒してよいのか分からないバカだと改めて痛感させられた。

わたしのこと好きになってももらえるように頑張ります？

だから、このままでもいいからそばにいさせてください？

自分勝手かもしれないけど？

気味の悪い笑い声を胸にまとい込みそうになる。

ああ、自分勝手だよ。どうしようもなくな、ただし度が過ぎる。

まずどこからかというところから「このままでいいから」という発言だ。あんたが善し悪しを決めることじゃなく、「このままできていることが当たり前」なのさ。

そばにいてもいいですかならまだいい、そばにいさせてくださいという自分の都合でしか考えてないだろ。それと自分勝手だと申告しておくことにより罪悪感が少しはマシになるとあんたは無意識に

心得てんだよ。

自分のやってたことがよく分からなくなってきた。もしかしたら無意味どころかとんでもないお荷物を自ら進んで作り受け持ってしまったのかも知れない。

人のこと言えない、なーんも先回りできねえバカだ。

ただしいまはまだ仮面を全身被ったまま。下手なことは口に出せない。引きつつているだろうなと思いつつも、なんとか笑顔を貼り付けた。

「それには残念だけど応えられないな。僕、好いてるひとがいるんですよ」

「．．．なんとなくそうだろうなってわかります。それでもいいんです」

「たぶんそんなにコロコロ変わるような心持ちじゃないんで．．．下手したら十年くらいは」

「十年でも二十年でも三十年でも」

はあ？とつい言ってしまいそうになる。危ない。

あんたは待っていられても、オレはそうじゃない。生憎熟女好きでもないし。三十年も四十年もたったらただのバツイチばあ以外の何物でも無い。

純情な女はこれだから困る。

東海は頭髪をぼりぼりと掻いた。

何も知らない。無知は恥ずべきことだと、どうして日本人は思う奴が少ないのだろう。

「本気でそのひとが好きなんですよ。だからあなたには傍に居てほしくない。わかってもらえないと困るんです」

少し語調が強くなる。

「．．．そうですね。すいません、面倒なことしちゃって。でも」

覚えてなくてもいいからきいてほしかったんです。

そう女はいう、ゆっくりとドアを開けて廊下へ消えた。

必死で保っていた身体がずしんと重くなる。鉛のようで、ベッドにもつれ込んだ。

少し貧血気味なのか頭が鈍く痛む。

いつもあの女と会ったときはこうなるのだけれど、今日は特に症状が酷い。

化学式のように組み替えれば反応させれば覚えればいいことは人間には通用しない。

苦しい。

悪いけど、冥界にいったって地獄にいったってあんたのことは好きになれそうもないよ。もしかしたら宮野さんへの気持ちよりも確かなことだと思える。

でも、と東海は目を閉じた。

あそこまでストレートに邪気も無く自分の感情を吐けるというのは少しだけうらやましい。

いつも先回りして裏を読んでゴキブリさながらこそそと動き回るのが巧みな技と思ってたけれど、笑いたくなるほどの気持ち悪さでも相手に印象を残す。

恋する者同士、ここは仲良くしていきましょう、そう笑いかけてみてもいい。

オレも伝えようか。

案外正攻法に弱いタイプかもしれないし、と考えているうちに携帯のディスプレイには発信中の文字がからかうように走る。耳が熱い。

『はい、宮野です』

かすれた声が愛しすぎて、死ぬかと思った。

タンブル（後書き）

灰原さんははんば工藤氏と蘭姉ちゃんのために解毒剤を作ってるんじゃないですかね。25巻の「もしかして・・・逃げてる？冗談じゃないわ・・・」のシーンとかもつとそういうところ見せて欲しいっすね。焦げたMDが気になるところです。

次回もお楽しみに？（・・ω・・）

インペリアルトパーズ

涙は眼球に水分を含ませもう零れてこなくなる。

左右対称そのままの顔を映している鏡に眉をひそめてみる。また悪化する。目元が腫れているせいだ。

志保はうんざりした。勝手に痕を残して拭われる涙にも、自分にも。

新一の声を聞けばいつでも切なさ、あとおしの希望が瞳を閉じさせる。

奈々の声は私に似ているかもしれないけれど、自分の軸をぶらさず物事をしっかりと軽快に話してみせる様子がときどき乗り移ってしまったのではないかと

思わせるほどに酷似しているのだ。

守らなければならない彼と自分の娘がいる。

それでいい、幸せが過ぎて表面張力などものにならないくらいだ。

彼とかわいい彼女がどうなろうと私の知ったことではないのかも
しれない。それでもあのふたりとは縁遠く隣り合わせていた。言う
なれば世界の軸だ。

そのまわりを世話しなくかけずり回っていただけなのだ、灰原哀
という少女は。

それだけのこと。

そう心から思っているのに、この有様。

情けない。愚劣。

鏡から身体を離し、後ろに目を背けてみる。

ふらふらと夢遊病のように、自分の足が己のものではないように
歩み出て行く。

——
行っ
ては
いけ
ない。

強烈な直感に行動を蔑ろにされ、それでも気付けばドアノブを回
し押し開けていた。

「・・・あなた」

ああ、だから行っではいけないと言ったのに。

「みやの、みや、」

志保の名前を連呼しながら、アパートの階段上がりきらず喘いでいるのは紛れもなくあの名探偵さんだった。

がたんがたんとは不安定に乱雑に歩き、それこそドラマのクライマックスみたく、肩を引き寄せられ抱きしめられた。

安心しそうになってはっと目覚める。離れようと手で胸を力一杯押し返す、びくともしない。

喧噪の中に少し乱れている心拍音が聞こえる。

「あ、あのさ」

「離してもらえないかしら」

バカね。

こんなところ誰かに見られでもしたら、なんて言い訳するつもり？

ところが新一はあっけらかんと拒否の言葉を口にした。

「やだ。このままがいい」

「あなたはよくても私は悪いの」

「嘘。そんな顔してない」

「感情が表情に出る女だと思われてたなんて心外だわ」

「そうかなあ。宮野って無表情のときがいちばん感情的というか、なに思ってるかすぐ分かる」

シチュエーションにまるで似合わない彼の暢気な口調と会話に抵抗するのもバカらしくなる。

白い目を向けられた新一は、こほんと咳払いして得意げに笑った。

「でも、五分で来たら」

「頼んでないわ」

「可愛くねーの」

「あら、ありがとう」

あなたなんて会いたくもなかった。過去進行形ではなく、今でもそう思っている。

何故かどうしようもなく恋しい。

離反していく欲望にどう佇んでいればいいのだろうか。見当も付かなかった。

「・・・あのな、言いたいことがあって、全力で来たんだけど」

「さっさと言って全力で帰って」

「そうする」

「で？」

「俺んち、来ない？」

「は？」

「・・・」

言いたいことは述べたというように黙りこくり志保をじっと見つめ出した。

志保のポーカークフェイスも崩れない。相手の次の言葉を待つ。

お互い、状況と相手の性分を照らし合わせればだいたいの場合通じ合う。この姿になってもそうだったはずだ。

当たり前のことが通用しないことにふたりはしばし気付かないままであった。

たっぷり数十秒間見つめ合ったのち、折れたのは新一のほうだった。

「一緒に暮らそうって、ちょっとプロポーズみたいな感じで言っただけだな」

「．．．大丈夫？」

そのご自慢の頭脳がいかれでもした？

「ばーろ、大丈夫じゃないように見えるか？」

「ええ」

「あ、そ」

そんなに俺ってカチカチのイメージしか与えられてないってことかね。

嘲笑混じりの苦笑いの先にほんの少しの哀しみが見えた。

思い返すには思考がとても追いつかないほど、記憶の中にはいつもあの小さな少年がいた。

それでもこの人間を語るには――あの黒髪の彼女無しに成り立ちはしないだろう。

あなたはどうか？

奈々と会ってみて、あの子は誰に似ていると思う？

私のことを思い返して懐かしむようなことがこの十年程のあいだ、いちどでもあった？

「まあいかれてるかどうかは別として、返事は？」

「やけに急ぐのね」

「気が変わらないうちに聞いておきたいんだ」

「気が変わらないうちに言うておくけどお断りするわ」

「えっ、なんで」

「嫌よ、あの子の後釜みたいじゃない。失礼だわ」

この男はいつでも自分の言いたいことやりたいことを遠慮しない。それをよしとしてこれたのは強力なツキの運だろう。幼児化するという数奇な運命を渡りしても元の姿、何も無いかのようにここにいる。

変なところで鋭く、変なところで世間知らず。厄介だ、どちらかに偏っていればいいのに。

ふと耳に肌寒さを感じる。風で髪の毛が乱れているのだ。手櫛で

撫でつけようとしても腕ごと抱かれていてはそうもいかない。

そつと異物感を感じ見上げると、新一の手のひらが志保の耳から頬にかけてを包み込んでいた。

男の表情は自分でも何をしているか理解できていないふうで、志保はそつと笑って手を振り払った。

相手の身体はこもった熱なのかほてっているのか、いくら冬といっても暑苦しかった。

暖かいと愛しさを素直に受け止められるほど殊勝な女でもない。

「そういつつもりで言ってるわけじゃねーんだ」

「どういつつもり?」

「言葉通り」

瞳を隠した。

煉瓦もようを貼り付けた安上がりりの柱が甲高い声を上げた。

誰が来たのかすぐに分かる。自分の子供の足音が分からない母親はいないだろう。

「お母さん」

志保を抱く手がゆるんだ。

なんなのだ、あれは。

奈々は眉をひそめた。そしてちょっと憤慨もしてみた。

志保をたぶらかすような真似をして、私が黙ったきりでいるとでも思っているんだろうか。そこまで能天気でもないだろうけれど。

「なにやってんの」

「奈々ちゃん」

わざとらしく、さも気付いたかのように奈々の名前を口にした。志保の瞳が大きく見開かれる。奈々を見つめたままだった。耐えきれず背中を向ける。

「こんなとこでなにやってんの？」

「いや、これには訳が」

「訳なんかどうでもいいけど、寒いから早めに中入ったほうがいいんじゃない」

「あのさー！」

思いつきのように大声を出した男に、何、と至極迷惑そうに返事をした。

「お父さん欲しくない？」

「は？」

「結構な二枚目で頭も良くて知識もあっていざというとき頼りになるお母さん大好きなお父さん」

ふふん。

志保のくすぐるような笑いは、聞いたことがない声色だった。手のひらに力が入る。

複雑な心境だった。

面白いものを見てみたいなんてほざいていたくせに、いざ突きつけられると後ずさるなんて、かつこ悪いことほかない。

なら受け入れて笑ってみるくらい、出来そうなものじゃないか。

どや顔で男を見上げてみた。

ちょっと驚いたように口を半開きにする。どこまでも気に触る人。

「悪くないね。ね、母さん」

「奈々」

「男手って大事なんだよ」

「いつ殺人犯が乗り込んでくるかわかったもんじゃないわ。危険に晒されるだけよ」

「おいおい、そこまで言わなくても」

「本当のことを述べたまですよ」

ついつと顔をそむける志保が手の届かない母親とは到底思えず、ものめずらしさに奈々は二人を凝視していた。

寒い。手編みのミトンの中で指先をやつとのこととで動かしてみる。思うようにいかない。はんだを流し込んだようだ。

「ずいぶん卑怯な手使うじゃない？あの子を買収するなんて」

「ばれてた？」

「あんなわかりやすいところでスタンバイして予定調和な偶然を

装われてもね。それも計算？」

「・・・やりにくい女」

「あら、ありがとう」

遠いことのように会話が聞こえる。

そうか。

やっぱりこの男は狡賢い。どうでもいいところでバカ正直で頭が切れて、先が読めなくて癪に障る。

それでもこんなに楽しそうなお母さんは見たことがなかったのだから——私も役不足ということだ。

悔しいな、と奈々は口をへの字に曲げる。

ミルクをたつぷり入れたコーヒー。乳臭さがただようそれを唐突に飲みたいという欲求がわき上がる。

マスターはなんと言うだろうか。きつとあのひとなら新一と奈々の間の変わりようなど見抜いてしまうだろう。

昔からあなたは手段を選ばないところがあつただとかそれを助長

させていたのは宮野のほうだとか舌戦を繰り広げていたふたりに二歩、近づく。

きょと同じ表情にまた何か思いながら、にっこりぶっ飛んだ笑顔を作る。

「とりあえずお父さん、お母さんから離れてくれる?」

頬に少し血が上った。

ふっと志保の目元が緩む。大好きな母の顔。触れられない。

冬の凍てついた冷たさは白い吐息に拭い攫われた。

インペリアルトパーズ（後書き）

このクソ暑いときに冬の描写とは至難の業でありました。

次回もお楽しみに（、・ω・、）

クリスタライズ（前書き）

最終話です。

クリスタライズ

階段を上がりきり重い扉を開け放すと、晴れ晴れとした空はビルの輪郭に切り取られ雲は呼吸をするように流れていた。昼休みの時間帯だからか、寒さも多少緩い。東海は自動販売機で缶コーヒーを買った。

金網に正面からもたれる。手でなぞってみた。ずるずると中途半端に滑っていく。

右手が熱い。コーヒーを持っているほうだ。プルを剥がして液体を喉に流し込むと、苦みが舌中染み渡った。

まぶたを閉じれば宮野さんの姿が—— 見えない。見える筈ないだろ、アホらし。

背後にわずかばかりの気配を感じて肩に顎をやると、栗色の髪をした美女が佇んでいた。少し吃驚する。

「宮野さん」

声を掛けても、気まぐれな天才が適当に掘り起こしたような横顔は微動だにしない。それに少しばかり安心して、笑いかけた。

「暖かいですね。研究は進んでますか？」

「進んでなきや困るでしょう」

「ははっ、まあそうだけど・・・そうだ、奈々ちゃんは相変わらずで？」

「奈々？そうね、だいぶ丸くなったかもね。いいことか悪いことが私にはわからないけれど」

安心したような憂うような、微妙な瞳をしていた。楽しんでいるふうさえあった。

「善し悪しなんか、本人が決めることでしょう。母親のもとをいつか離れる日がきて、死ぬ日がある」

「死ぬ、ね。ふふん、最近あまり考えることのなかった概念だね。研究とは別に」

「しょっちゅう考えてたら逆に困る」

苦笑いした。彼女も口元を緩める。会話にか、暖かい世界にかは

分からない。

ちよつと苦しい。月日があれから．．．五年か、経って少しは薄れてきたと思つていた。確かに恋心なんて青臭いものは薄れている。今彼女に抱くのは、憧ればかりだ。こうして隣にいて、ちよつと言葉を交わすだけでその日なんとか世知辛い世の中がなされる。それだけだ。

空を見上げてコーヒーをあおる。

眩しくて直視出来ない。目をやられる。

「そついえば、宮野さん」

横目で呼びかけた。

「研究所辞めるらしいですね？」

「ええ」

「引き抜かれたつて。へえ、まこんなショボい研究所に宮野さんみたいな優秀な人が何年もいたつてこと自体ありえませんかね」

「本当に能力がある者に場所なんて関係ないわ。でも同じところばかりいるというのも、あまりいいことだとは思わないから」

「ふうん」

風が柔らかく髪を撫でてゆく。互いにもう言うことはない。缶の中は空になっていた。握りつぶせるほどの握力もそろそろ衰えてきた。ゆっくりとでも確実に、時間は経っている。老いてゆく。失いながら知っていく。

何か言わなければ。

これできつと最後だ。東海は送別会なんてものに参加するタチではないし、もうこの時間を最後にこうして彼女といれることはなくなる。

懐かしさと若い自分への後悔が頭をもたげるばかりで、次の行動が思い浮かばない。キスでもしようかと顔を近づけると、さりげなく避けられた。

旦那さんと娘さんを大切に、と付け加えると、旦那じゃないわと不服そうな言葉が返ってくる。名探偵の屋敷で暮らしているのに、籍を入れていないらしい。よくわからないが、理解する必要も欲もない。

去るために振り返った。扉に足を踏み入れたところで涼やかな声が聞こえる。

「敬語」

「はい？」

「敬語、ちゃんと使えるようになったじゃない」

微笑みはその顔に浮かぶ。

見惚れるより先にその笑顔は引っ込んでしまふ。そむけられた華奢な背中を見つめた。

ひとつ、何かが終わる。

解いた紐を再び結び直して、本棚に並べ直す。でも物語は変わらずそこにあり、誰も知らない場所で続いてゆく。

宮野さん、あなたとの出会いもまた、誰かによって忘れるんだ。

携帯を手に取り、あの黒髪の女の番号を呼び出す。飲みに行きましようか、誘ってみるのもいいかなと珍しく思った。

東海はその重い扉を、ゆっくりと閉めた。

F i n

クリスタライズ（後書き）

最終話でした。

東野の中ではシャトヤンシー＝東海さんと志保さんの話という認識がどこかにありまして、最後はやはりこのふたりだなと。最後までご愛読いただき本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178o/>

シャトヤンシー

2011年8月14日23時31分発行